

序論

0.1 目的

日本語は文脈などによっていくつかの文の成分が省略されるのが一般的特徴である。これを理解するには、省略された不可欠な文の成分を復元させうるある種の文のモデルに基づいた基本文型_{#1}の研究がなおさら必要である。本書の目的は文のモデルの一つとされる結合価理論に則って、主要な単語結合_{#2}の中心をなす動詞とそれが支配する成分の数、意味役割つまり動詞の結合価を解明し、日本語の基本文型を抽出すると同時に、同じ姿勢・観点から日本語の長文ないし名詞節・副詞節を分析することによって、日本語の辞書記述に寄与する点である。換言すれば、従来日本語辞書の語彙記述に際し、おろそかにされてきた結合価への関心を喚起するのが本書の狙いである。

思うに辞書記述と文法記述は車の両輪のような相互補完的存在であるが、残念ながら、辞書の業績に対する学界の評価は依然として低い。情報処理振興事業協会(1987)と小泉ら(1989)を除いて現在の日本語辞書の語彙記述に関しては、音韻・形態・語義ないし動詞の自動詞・他動詞などを考慮に入れて記述するのが常であろう。それにもかかわらず、同じ動詞の格支配に属する言語のドイツ語辞書やロシア語辞書と違って、詳細な統語論情報を含む形容詞・名詞の結合価はもとより、動詞の結合価への記述が皆無に等しいところを見ると、不思議と言えば不思議である。

実際筆者がこの結合価の基礎的研究に取り組んだきっかけは次の奥田(1978)の一節に触れたことによる。

母国語であれ、外国語であれ、単語の正確で、たくみな使用のために、字びきが必要である。この字びきは使用のそとにある単語のリストであって、これを倉庫にたとえることができる。字びきの編者はこの倉庫に単語をひろいあつめて、いちいちの単語の性質をいろんな側面からあきらかにするわけだが、このとき、かれが単語の本質をどのように理解しているか、どのふかさで理解しているかということで、できあがった字びきは当然ことなるものになる。

たとえば、ロシア語の字びきでは、動詞のいちいちの項目に、その動詞の格支配 government が記入してあるのがふつうであるが、こうするのは、動詞の語彙的意味が格支配のなかで実現することを、字びきの編者はしているからである。多義的な動詞における派生的な意味は、他の単語（とくに名詞）とどのようにむすびついているかということのなかで実現しているのだが、字びきの編者はこのことをしているのである。しかし、日本語の字びきの編者たちは、動詞の格支配について、けっしてふれようとしない。このことは、おそらく構文論的な構造を単語の語彙的な意味の存在の形式としてとらえることのできない、字びきの編者たちのよわさからきているのだろう。単語は構文論的な構造のなかに存在する。とすれば、単語が構文論的な構造から自由であるはずがない。

20年に近い歳月が立った今でも、日本語辞書の語彙記述はなお結合価に関する情報が欠落していると言わざるをえない。

0.2 結合価理論の概観

結合価に関する文献は膨大な量に達し、しかも各国に散在しているので、とうてい一人の力で消化できるものではないが、以下先学の研究を頼りに、各国の結合価理論とそれに関連した辞書記述の流れを自分なりに整理した上で、この理論の問題点を明らかにする。

0.2.1 フランス

結合価と言えば、誰しも TESNIERE (1959) の名を思い付くだろう。確かに一般の結合価の概念は TESNIERE によって初めて言語学に定着させられたが、実際理論史

的な起源はGROOT (1949)の文法論に遡る。GROOTは自ら創出した結合価の概念を基礎に、統語論的体系を構築しようと試みた¹⁰⁾。オランダ語で書いた本書はあまり人に知られていないため、TESNIEREの結合価理論と違って、言語学界への影響力をさほど持っていない。

結合価の考え方は化学の原子と原子価の概念を言語に適用したものである。化学の原子価とは原子の結合力つまりある元素の原子が持っている結合の数、最も具体的に言えば、元素の一原子が直接または間接に1とする水素原子Hと結合しうるかを表す数のことである。例えば水(H₂O)において、酸素原子O 1個は決まって水素原子H 2個と結合するので、原子価2に相当する。

TESNIEREが結合価の概念を導入したのは1個の動詞が何個の名詞句を支配しうるかを説明するためである。この結合価の概念はTESNIEREが打ち出した理論の最も重要な所と言えよう。TESNIEREは“Alfred parle.”を例に、この文に単なる2個の要素が含まれているとされる従来の文法家の発想と違って、文たる文は Alfred parleの2個の要素の外に、Alfredとparleの2個の要素を関係づけるもう1個の要素つまり連結(connexion)が存在してはじめて成立すると考えている。水は酸素と水素が結合してできた化合物であるが、その性質は本来の酸素とも水素とも違っている。連結はあたかも化合が化学反応に決定的影響を与えるがごとくに、文の統語的構造に大きく作用する。

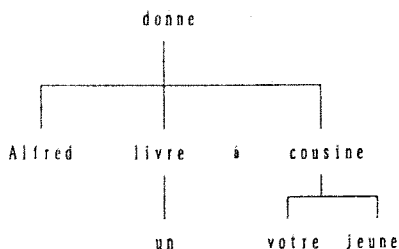
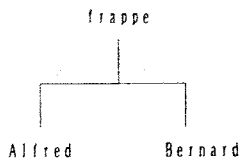
このように連結による要素間の依存関係は支配成分(régissant)と依存成分(subordonné)の形で表されている。また“Alfred parle.”この文に即して言えば、Alfredは依存成分、parleは支配成分にそれぞれ属する。このような依存関係を樹形図で示せば、次の通りである。



つまり文の頂点に立つ動詞parleは支配成分、動詞の下に位置する名詞句Alfred

は依存成分、縦線は連結というように、この文は三つの構成要素からなっているのである。

なお“Alfred frappe Bernard.”と“Alfred donne un livre à votre jeune cousine.”との二文を見られたい。



上の文では動詞frappeは支配成分、名詞句AlfredとBernardは依存成分である。下の文では動詞donneは支配成分、名詞句Alfredとlivreとà cousineは同じく依存成分に属すると同時に、もう一つの依存関係を示す名詞句livreは支配成分、付加詞unは依存成分、名詞句à cousineは支配成分、付加詞votre jeuneは依存成分に属するようにいずれも階層的樹形図に具現されている。かくてTESNIEREにとって構造的統語論はもっぱら連結による階層的樹形図を作り上げることで、文の構造様式を研究する学問である。発話連鎖は一次元的であり、直線的であるのと対照的に、こうした樹形図は多次元的であり、階層的であることは構造的統語論においてまさに外部的発話連鎖の背後に内面的構造様式が横たわっていることを意味する。換言はれば、外部的な話線上の語順は常に内面的な構造上の語順を示す樹形図に具現されるのである(註4)。樹形図においては「主語-目的語」「主語-述語」「自動詞-

他動詞」といった伝統的概念が一掃され、文の頂点に位置する動詞を中心に、動詞に直接依存する成分は共演成分 (actants) と状況成分 (circonstanants) に二分される (66)。前者はさらに第一共演成分 (= 主語)、第二共演成分 (= 直接目的語)、第三共演成分 (= 間接目的語) に下位分類されると同時に、樹形図では無差別に同じ階層に配置される名詞句であるのに対し、後者はもっぱら副詞類からできている。共演成分の数は動詞の結合価によって決まるが、三つを最大限とする。これと逆に状況成分の数は無制限である。

TESNIÈREは動詞を鉤が付いた原子に、一定数の共演成分を引っかける動詞の結合能力を原子価にたとえて、動詞の結合価つまり動詞価と名付けている。かくて動詞が何個の共演成分を支配するかによって、0 価動詞 (pluie) ・ 1 価動詞 (tomber) ・ 2 価動詞 (trapper) ・ 3 価動詞 (donner) といった四つの分類がなされる。TESNIÈREの結合価理論を概観すれば、上述の通りであるが、それは直線的発話連鎖は統語論的表層構造、階層的樹形図は深層構造へ変わって、格文法ないし生成文法の理論形成に寄与すると考えられる。

TESNIÈREの結合理論ではもっぱら動詞の結合価の問題を扱っていたものの、動詞に限らず、形容詞ないし名詞の結合価の問題も俎上にのせられるのが昨今の流れであろう。TESNIÈREが取り上げた結合価は一般的に統語的結合価と考えられていたが、その後意味的な結合価ないし論理的な結合価などの概念も統出している。特に動詞の格支配を重んじるドイツ語や日本語などの表層構造上の特性を記述するのに有力な結合価理論が言語教育ばかりではなく、電算機による自動構文解析ないし翻訳さらに辞書記述に大きく貢献できるのは明白であろう。もっとも本書の研究目的に繋がる辞書記述に結合価理論がいかに有効に適用されるかは後述の辞書で分かると思う。

ところでTESNIÈREの結合価理論はいち早くドイツの言語学者の共感をを得て、ヴァレンツ理論 (Valenztheorie) になっているものの、本場のフランスではいささか遅れを取っている。とはいえ、DUBOIS (1979) の辞書記述には不十分ながらも結合価の概念が適用されている痕跡が見られる。例えば、1061ページの *Verbes transitifs directs* に関しては次の記述がなされる。

2. Verbes transitifs directs

— Verbes transitifs avec un complément d'objet direct obligatoire ; ces verbes sont proches des verbes opérateurs :

COMMETTRE QQCH (ACTE)

— Verbes transitifs avec un complément d'objet direct facultatif (noté entre parenthèses ou sans compl.) ; quand l'objet n'est pas exprimé, le verbe est employé intransitivement :

MANGER (UN ALIMENT)

— Verbes transitifs avec deux compléments obligatoires, l'un direct, l'autre introduit par une préposition (à, de, etc.) :

CHARGER QQN DE + INF., DE QQCH

— Verbes transitifs avec deux compléments obligatoires dont l'un (prépositionnel) disparaît quand le sujet est au pluriel :

COMPARER QQN, QQCH (λ, AVEC QQN, QQCH), COMPARER DES GENS, DES CHOSES

— Verbes transitifs avec deux compléments, l'un direct, l'autre indirect, conjointement ou séparément facultatifs :

DONNER (QQCH) [λ QQN]

— Verbes transitifs à deux compléments dont le premier est obligatoire et le second facultatif :

PERSUADER QQN (DE + INF., QUE + IND.)

— Verbes transitifs à deux compléments dont l'un est direct et l'autre un complément de lieu facultatif :

ACCOMPAGNER QQN (QQPART)

— Verbes transitifs à attribut du complément d'objet (nom ou adjectif) :

JUGER QQN, QQCH + ADJ. ATTRIBUT ; TRAITER QQN DE + N. ; NOMMER QQN (+ N. DE FONCTION)

つまり義務的補足成分および準義務的補足成分の数に基づいて、直接他動詞は上述のようなグループに細かく分類できるのである。ここでの義務的補足成分は削除されない成分、準義務的補足成分は文脈などによって削除される補足成分というようにいずれもTESNIEREの共演成分の概念に相当するものであることに注意された。なお在間(1995)は従来の義務的補足成分・準義務的補足成分のかわりにそれぞれ必須的補足成分・任意的補足成分という用語を使うとしている。

ちなみにDUBOISの名詞のカテゴリの分類基準は石綿(1983)の「日本語用言の結合価」に見られる名詞の意味特徴に相通する所があると思う。

ところで動詞を中心としたTESNIEREの結合価の依存関係の考え方をさらに発展させて、動詞と名詞的成分との間の関係を結合相手の不可欠性つまり相互依存性と捉えて、文構造を記述するのが依存文法である。これは主としてドイツないし旧ソ連で発展してきた文法理論の一つである。

このように「結合価」の概念が往々にして「依存」と一線を画するのは難しいようである。厳密に言えば、前者は語彙的なもの、後者は統語的なものに属すると考えられるが、現在では学者によって違った解釈がなされる。それはそれとして様々な結合価理論に共通するのは掃納法を中心とした統語論と辞書との関係を重視する点であろう。つまり現段階では演繹法が果たして言語学の最も重要な研究課題に位置付けられるのかに疑問を抱いた上で、言語は語彙的一文法論 (lexico-grammar) の系統に属すべきだという点についてフランス語学界の間で意見の一致を見るようになった。思うに結合価は上位の「語彙」とそれによって支配される下位の「語彙」との依存関係を意味する以上、当然ながら、その記述に際して、語彙を集大成した辞書あるいはコーパスの形に具現されるのである。語彙を出発点に、統計・分類の方法を通してコンピューター言語学を導入して、研究を行うのが時代の趨勢であろう。

こうした考えに基づいて、従来の結合価理論を大幅に修正してさらに発展させて、語彙一文法論 (lexico-grammar) を唱導するのが GROSS (1975) であった。GROSSはある文を成立させるために満たす諸条件を前提に、単語結合の制約とその規則を設定するモデルを提出した。グロス従来の変形 (transformation) は単語結合に対する統語的・意味的制約を探究する実験的な手段として、大量的・系統的・実証的な用例収集を必要とする語彙一文法論の基礎作りに寄与すると認めている。

GROSSは語彙と統語論との相互作用による種々雑多の依存関係があまり複雑である、特定の言語の文法に対する可能な限りの研究が語彙記述の一般化の基礎作りに貢献する、こうした研究を通じて言語事実に比較的に近い動詞文法・形容詞文法・名詞文法・副詞文法・助詞文法などすべての分野にわたる精密な記述が普遍性のある解釈文法の構築を可能にするなどの認識に基づいて、マトリックスの変形規則を設定することで単語結合間の共起性と実現可能性の語順配列との規則を実証的に観察し、ある文を成立させるために満たす諸条件を明らかにしている。

GROSSにとって語彙－文法論は表層構造の形式を通じて語彙に含まれる文法情報を収集するだけでなく、ファジー理論を借りて、集合体の分布特徴を記述することを目的としている。GROSSのマトリックスの正負値の概念はまさにこの記述に不可欠な基本的手段と言える。

語彙現象をもっと系統的・実証的に記述するには口語資料と反証の資料がどうしても必要であるし、これらの資料の処理に関しては、直感による判定と補足という手段にまたなければならぬのが語彙－文法論の特徴の一つであろう。

語彙－文法論では充足文を₁₆₎の諸条件を満たす核の文という基本概念に基づいて、ある語彙を文中に入れ、単語結合の様々な依存関係を検証する。この目的を達成するためには、文がある範囲に限られる核の文の設置を必要とする。核の文は常に単一の述語を持つSV0を指す。これは会話場面などの語用論的要素ないしテキスト分析などのレトリック要素を排除するだけでなく、すべての添加・削除・変位・置換がそれなりの統語－意味論的機能を持って、充足文の言語形式に多く影響することを意味する。と同時にこれは、充足文の言語形式が述語の構造、つまり述語を中心に、述語の左方または右方に位置する諸成分との結合によって決定されることを意味する。注意すべきは充足文の成分は統語－意味論に属するのに対し、伝統的な文の成分は統語的機能を果たしている点が異なる。

GROSSはこの理論を駆使し、1990年までにすでに動詞6000語を分析すると共に、マトリックス81個を設定し、31000語に達する語彙を記述することになった₁₇₎。

ところでつい最近出版された『現代韓国語動詞構文辞典』(Hong Chaesong 洪在星, Hyondae Han'gugó t'ongsa kumun sajon, ソウル, 1997) はもっぱらGROSSの理論に基づいて、基本動詞770語を収録して編集した辞書である。実際編集者が前書きの中でこの辞書は上述のフランス言語学者 GROSS の語彙一文法論 (lexico-grammar) が唱える方法論をヒントに、編集したものであり、韓国語の動詞研究・韓国語教育・韓国語の辞書編集・韓国語の情報処理などの各分野に生きた語彙資料として寄与するという趣旨を述べている。

この辞書では動詞は一般(自由)動詞・熟語動詞・機能動詞・補助動詞と四種類に分類される。一般(自由)動詞は自動詞と他動詞に二分される。注目すべきは熟語動詞と機能動詞との項目を立てて、しかもそれに見合う記号を使い、文型の中に盛り込むという点である。次の2例を参照されたい。

1) 《熟語》《自》 $N_0 N_2$ -에 C_1 -을 V

¶ 그가 두 사람 사이에 다리를 놓았다.

<彼が二人の関係をとり持った>

ただし、 N_0 は主語、 N_1 - は直接目的語、 N_2 - は間接目的語をそれぞれ示す。動詞 (置く) は決まって名詞と共に起るので、記号Nの代わりにCが使われるようになっている。

2) 《機能》《自》WN $_{0..0}$ V

$N_{0..0}$ = 理解, W = N_1 -이 N_2 - (에+이)

¶ 나는 그의 행동-(에+이)이해이 안 간다.

<私は彼の行動が理解できない>

ただし、 $N_{0..0}$ は述語名詞、Wは述語名詞に依存する名詞を示す。

外に零連鎖という記号Eは文中に位置する補語への制約、記号[・]は指示詞の対応関係、記号Lは名詞削除、Rは複合名詞句あるいは補文の再分離を示すなど、『日本語基本動詞用法辞典』より一層精密な記述モデルが用いられているのは言うまでもない。なお本辞書に出る 가르치다 「教える」の記述は次のようである。

가르치다(授) ㉑

〈피〉 가르치자

㉑ N₀ N₁-을 V

1. N₀=인물, N₁=인물

㉑ 대중을 가르치려고만 할 것이 아니라 또한 대중에게서 배워야 한다./그들은 시골에서 농사지으면서 네 자식을 모두 대학까지 가르치느라 온갖 고생을 다하였다.

2. N₀=인물, N₁=N_i-의 N_j, N_i=인물, N_j=버릇

㉑ 너의 못된 버릇을 내가 단단히 가르쳐 주마./그 녀석-(을+은) 버릇을 단단히 가르쳐 놓아야 되겠다.(R1)

㉒ N₀ N₂-(에게+을) N₁-을 V

N₀=인물, N₁=언어·과목·기술·방법·길, N₂=인물

㉑ 김 선생님은 어학 연구소에서 외국인들에게 한국어를 가르친다./그는 대학에서 물리학을 가르쳤던 적이 있다./어미 고양이가 새끼에게 쥐 잡는 방법을 가르쳐 준다./나는 외국인에게 서울역으로 가는 길을 가르쳐 주었다./기영이 동생은 중학생들-(을+에게) 영어를 가르치고 용돈을 벌어 썼다.

N₀ N₂-(에게+을) S₁-것을 V

㉑ 요즘은 초등학교에서부터 학생들-(에게+을) 컴퓨터 사용하는 것을 가르친다./요즘은 초등학교에서부터 학생들에게 컴퓨터를 사용하도록 가르친다./그는 학생들에게 김구 선생이 한국 현대사에서 중요한 인물이라는 것을 철저히 가르쳤다.

N₀ N₂-에게 Q₁-을 V

㉑ 그는 우리에게 이런 경우에는 어떻게 하는지를 가르쳐 주지 않았다./우리 과장님은 내게 할 일이 많을 때는 어떤 것을 먼저 해야 하-(나+는나)-를 가르쳐 주지 않았다./어미 고양이가 새끼에게 어떻게 쥐를 잡는가를 가르쳐 준다.

㉓ N₀ N₂-에게 S₁-고 V

N₀=인물, N₂=인물

㉑ 70년대에는 학생들에게 그가 뛰어난 정치가라고 가르쳤다./70년대에는 학생들에게 그를 뛰어난 정치가라고 가르쳤다.(R2)

㉔ N₀ N₂-에게 N₁-을 N₃-로 V

N₀=인물, N₁=인물·추상, N₂=인물, N₃=인물·추상

㉑ 70년대에는 학생들에게 그를 뛰어난 정치가로 가르쳤다./한때는 광주 민주화 운동을 광주 사태로 가르쳤던 적이 있다.

0.2.2 中国

中国では結合価理論が朱(1978)によって始めて導入された。氏が発表した「『字』の結構和判断句」という論文をきっかけに、劉丹青・王玲玲らの研究者が輩出し、結合価理論が「配価語法」と訳されて学界に定着するようになった。沈ら(1995)の論文集『現代漢語配価語法』という研究成果が、結合価理論が今でも通用することのなによりのあかしであった。現段階では結合価理論を中国語に適用しての研究成果はほぼ次のようである。まず取り上げるべきは動詞をはじめ、形容詞と名詞との結合価は統語論か意味論か語彙的統語論か部分的統語論と部分的意味論が組み合わさったものかのいずれかに属するかについて、甲論乙駁、様々な意見が取り交わされ、一層結合価の性質をはっきりさせたという点である。

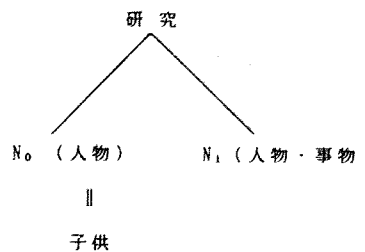
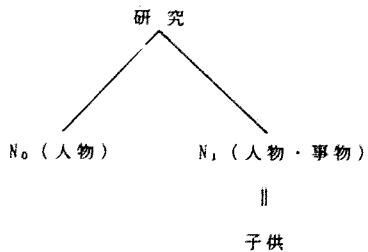
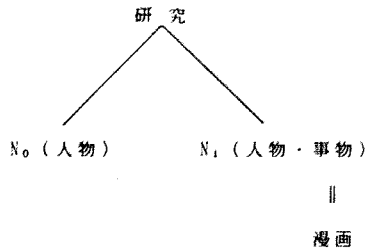
次に結合価を判定する際の原則と方法について、朱德熙・呉為章・張國寧・朱景色松・沈陽らが各自打ち出した選択基準は違っているものの、参考に価するものと考えられる。そして結合価の判定は意味分析を基礎に、形式的なテキスト手段を用いることが望ましいという点で意見の一致を見た。

さらに中国語語法の特徴に基づいて、動詞の結合価は名詞性成分に限らず、動詞性成分あるいは形容詞成分などの非名詞性成分を伴うことができるということをつきとめたことはTESNIÈREの結合価理論をもう一步進んで発展させたことことを意味する。

一方結合価による中国語動詞の分類がなされると同時に、従来なおざりにされてきた中国語形容詞・名詞ないし動詞熟語についても研究が行われている。

中国語語法の研究に結合価理論を導入することにより、「動詞性成分+的」の「的」の二義性の問題解決の糸口をつかんだほか、「对漫画的興趣」と「对孩子的興趣」はいずれも「对+名詞+的+名詞」の構造を持っているにもかかわらず、前者は一義性であるのに対し、後者は二義性である見解を呈示してくれた。日本語に即して言えば、「漫画の研究」と「子供の研究」には同じ原理が働いている。つまり「研究」は名詞だが、 N_0 (人物)と N_1 (人物・事物)との二つの共演成分を伴う「 N_0 (人物)が N_1 (人物・事物)に関する研究」という構造を持っている。したがって「漫画の研究」は「 N_0 (人物)が漫画(事物)に関する研究」、「子供の研究」は「 N_0 (人物)が子供(人物)に関する研究」および「子供(人物)が N_1 (人物・事物)に関する研究」というように、前者は一義性、後者は二義性という分析がなさ

れたのである。上述したところを図示すれば、次の通りである。ただし、下線部は表現上省略されたものを指す。



こうした研究の中で特筆すべきは王（1995）であろう。王は結合価理論に基づいて、動詞が何個の共演成分を支配するかにより、1価動詞・2価動詞・3価動詞と三つのグループに分けた上で、中国語動詞の特徴を踏まえ、動詞価のモデルを次のように提案した。

1. 1 価動詞 N_0V

1) N_0 = 施事 (agentive) ・ 行事 (executive)

V: 爆発・出発・労働・旅行・前進

2) N_0 = 当事 (experiential)

V: 悪化・負傷・死・破裂・失敗

2. 2 価動詞 N_0VN_1

1) N_0 = 施事 (agentive) ・ 行事 (executive)

N_1 = 受事 (patient)

V: 観測・擦・穿・捕捉

2) N_0 = 施事 (agentive)

N_1 = 結果 (result)

V: 出版・発明・創立・生産・制定

3) N_0 = 施事 (agentive)

N_1 = 受事 (patient)・結果 (result)

V: 剪

4) N_0 = 施事 (agentive)

N_1 = 处所 (location)

V: 住・経過・座・到・到達

5) N_0 = 当事 (experiential)

N_1 = 客事 (external)

V: 喪失・損失・看見・誤解・遇到

6) N_0 = 領事 (possessive)

N_1 = 屬事 (belongings)・分事 (partial)

V: 有・具有・包含・包括・共計

7) N_0 = 指事 (essive)

N_1 = 系事 (relative)

V: 是・姓・叫・系

3. 準2 係動詞 $N_0V \cdot N_0VN_1$

1) a. N_0 = 施事 (agentive)

b. N_0 = 施事 (agentive)

N_1 = 同事 (comitative)

V: 結婚・恋愛・聯絡・相助

2) N_0 = 施事 (agentive)

N_1 = 与事 (dative)

V: 送行・著想・說情

4. 3 係動詞 $N_0N_1VN_2$

N_0 = 施事 (agentive)

N_1 = 受事 (patient)

N₂ = 与事 (dative)

V : 回答・賠償・支援・通知・問・給

事實上この結合価値論と格文法を組み合わせた形で動詞1000語を収録して編集したのが林ら(1994)の『動詞大辞典』である。ちなみにこの辞書の推薦者は推薦の言葉の中で小泉らの『日本語基本用法辞典』を絶賛している。

参考に資するために、この辞書に出る動詞「教」(教える)の記述を見られたい。

教 *jiào* (他動) 把知识或技能传授给人。

【基本式】(施事(老师、外教、教授)+教+与事(学生、儿童、徒弟、三班)+受事(歌、知识、专业课、小提琴)) 她教了我一首歌。|她把那首歌教给我了。|她把那首歌教我了。|她给我教了一首歌。|那首歌她已经教给我了。|那首歌她已经教我了。

【扩展式】

(同事) (除了《红湖水、浪打浪》) 他还教了我一首民歌。|赵老师(跟高老师一起)教四班。

(基准) 她(比姐姐)多教了我一首歌。

(数量) 上官香老师(多次)教重点班。|钱先生教过(几次)美术。|歌词只教了我们(一段)。

(范围) 山区女教师(在极为艰苦的条件下)教出了这么多好学生。

(工具) 学校已开始(用电子计算机)教课。

(方式) 各幼儿园纷纷(利用现代化手段)教儿童语言。

(依据) (根据以往的经验)第一学期最好别教写作课。

(目的) (为了全家人的生活)王老师在病中也得教书。|我(为了学生)还是把这门课教下来了。

(时间) (今天)她教了我一首歌。| (在第一学期)师傅只教了一些基本技能。|这么多内容(一个星期)我可教不完。|王教授(从二十几岁)就教书。|这门课我已教了(十几年)。|他一直教(到三七年)。

(处所) (在国内)他就教这门课。|大家只好(在防空洞里)继续教课。|一班已教(到了第二册)。

これに先立って動詞に限らず、形容詞・名詞を含め、単語結合の概念に基づいて、編集されたのが張ら（1992）の『現代漢語実詞搭配詞典』である。この辞書では市川（1995）の『新編英和活用大辞典』（註）とほぼ同じく、(1)名詞(2)動詞(3)形容詞といった三種類の見出し語の分類がなされる。語彙数8000語を収録した本辞書は記述の不十分な所があるにしても、中国語辞書史上、最初の単語結合辞書の名に値するだろう。ちなみに名詞だけを見出し語とした『中国語関連語辞典』は香坂（1988）が編集したものであることを断っておく。

0.2.3 ドイツ

化学では化学反応とは価電子の起こす反応であると考え、価原子の数、また価電子の入るべき『空位』の数を原子価と言って、結合能力の指標とする。この化学の『空位』の概念は、BÜHLER (1934) によって初めて提出されたものの、結合価理論にまで発展しなかった。その後、BRINKMANN と ERBEN はドイツ語の結合価理論の先駆者として動詞の語彙的意味を構成する補語が省略できないというドイツ語の表層構造に着目して、TESNIEREの結合価の概念を最初にドイツ語の分析に適用した。

BRINKMANN (1962) の場合①例えば、Er legt das Buch auf den Tisch. に出る auf den Tisch はドイツ文の構造上不可欠な状況規定語だが、結合価の対象から除外される②主語の優位性が否定されない③格が全く違った取り扱いを受ける一などの欠点が出てきたのである。

ERBEN (1964) は主語や目的語ばかりでなく、構造上不可欠な副詞規定語ないし述語内容語を結合価の対象とした点において、BRINKMAN を一歩リードしていると思う。しかし彼のいわゆる結合価の副詞規定語は場所や方向を示すものだけに限定されている。それと同時に、結合価を理論的に判定する基準を示さないまま、ただちに基本文型を作り上げることが批判の対象となってしまった。

ところで結合価の概念を動詞の潜在能力であると考え、その対象を動詞だけに限っているBRINKMAN や ERBEN と違って、旧ソ連のゲルマン語学者ADMONI (1966) は結合価の概念を《結合能力》という言葉で捉えて、その対象を動詞だけでなく、あらゆる品詞に拡大するようになった。ADMONI は義務的結合能力と準義務的結合能力を区別したうえで、例えば付加語形容詞が名詞に対して持つ結合能力は義務的であるのに対し、名詞が付加語形容詞に対して持つ結合能力は準義務的であると同時に、対格が自分の上位に置かれた成分に対して持つ結合能力は義務的であるのに対し、対格が統語論上自分の下位に置かれた成分に対して持つ結合能力は準義務的であると説明した。ここでの《義務的》は《依存的》、《準義務的》は《支配的》の概念にほぼ相当する。

上述した様々な結合価の考え方の研究を集約し、外国人ドイツ語学習者のためにこの理論をいち早く辞書に適用したのがHELBIG・SCHENKEL (1969) の“Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben”である。両氏は従来の動詞の他動詞・自動詞という概念だけでは文構造上の諸問題を解決できないとして、結合価

と分布が組み合わさった概念を導入して、又成分を義務的補足成分・準義務的補足成分・添加成分と三つに分けて、動詞331語を記述した。

当時の生成文法を反映してか、両氏にとって正しい文を生成するためには、動詞の結合価すなわち補足成分の数(量)を知るばかりでなく、動詞の分布すなわち補足成分の質(名詞・形容詞・副詞などの範疇素性や主格・対格・与格などの格形態や[±有情性]・[±人間]・[抽象概念]などの意味的選択制限)を知る必要がある。後述の例が示したとおり、補足成分の量・質に応じて、動詞の三段階記述がなされる。ここでの義務的補足成分は動詞の『空位』の概念に相当する動詞の『位置図』なかに入り、削除されない文成分であるのに対し、準義務的補足成分は動詞の『位置図』のなかに入り、文脈などによって削除されうる文成分である。添加成分は動詞の『位置図』のなかに入らず、文脈などによって付け加えられるし、削除されうる文成分であり、従って結合価の対象にならない。動詞 *lehren* 「教える」に関する記述は次のようである。

lehren

- I. $lehren_1(S)$
- II. $lehren \rightarrow Sn, Sa_1/NS_{aas}, w/I/Inf, (Sa_2/Sd)$
- III. $Sn \rightarrow$
 - 1. Hum (*Der Professor lehrt Sanskrit.*)
 - 2. Abstr (als Hum) (*Das Institut lehrt uns, die Zeit zu nutzen.*)
 - 3. Abstr (*Die Zeit lehrt ihn Partei zu ergreifen.*)
- $Sa_1 \rightarrow$
 - 1. Abstr (*Er lehrt [sie] die Sprachen.*)
 - 2. Act (*Er lehrt [sie] das Schwimmen.*)
- $NS \rightarrow$ Act (*Die Geschichte lehrt, daß wir die Zusammenhänge verstehen | wann wir die Initiative zu ergreifen haben.*)
- $I \rightarrow$ Act (*Er lehrt ihn singen.*)
- $Inf \rightarrow$ Act (*Die Geschichte lehrt uns, die Zusammenhänge zu verstehen.*)
- $Sa_2 \rightarrow$
 - 1. +Anim (*Er lehrt die Kinder, die Hunde das Reifenspringen.*)
 - 2. Abstr (als Hum) (*Er lehrt das Institut das Sparen.*)
- $Sd \rightarrow$
 - 1. +Anim (*Er lehrt den Kindern, den Hunden das Reifenspringen.*)
 - 2. Abstr (als Hum) (*Er lehrt der Klasse das Einmal-eins.*)

Beispiele: *Franz lehrt seine Tochter die russische Sprache*
Diese Leute lehrten mich, auch mit solchen Problemen
fertig zu werden
Diese Erfahrung lehrte mich, wie man sich in solchen
Situationen zu verhalten hat

In Norm und Rede, vor allem in der Rede, wird *lehren* mit doppeltem Akkusativ offensichtlich als wenig systemangemessen betrachtet und normalerweise gemieden, und zwar durch Ausweichen auf inhaltlich in etwa gleichwertige andere Strukturen, etwa auf *beibringen* (Satzbauplan 13) und auf *lernen*.

Beispiel: *Bei diesen Leuten habe ich gelernt, wie man sich in*
solchen Situationen zu verhalten hat

Hie und da erkennt man auch die Tendenz, den Akkusativ der Person durch einen Dativ der Person zu ersetzen. Das klingt für die meisten allerdings offensichtlich so unüblich, daß man normalerweise das Ausweichen auf andere Konstruktionen vorzieht.

ところで最初に結合価の分類特に動詞の結合価の分類をそのまま基本文型へと発展させたのがENGELである。ENGEL・SCHUMACHER(1976)の“*Kleines Valenzlexikon deutscher Verben*”では結合価理論と共に依存文法に基づいて、動詞の補足成分を9種にまとめて、30種の文型リストを抽出した上で、動詞463語を記述した。つまり動詞の記述については補足成分の種類は勿論のこと、文型の指示のほか、受身用法の有無が明記されている。ちなみにHELBIG・BUSCHA(1988)は動詞の補足成分を10種にまとめて、97種の文型リストを提出した。

参考のためにENGELの動詞の補足成分9種と文型リスト30種と動詞「学ぶ」の記述を見られたい。

E ₀	Nominativergänzung	E ₅	Situativergänzung
E ₁	Akkusativergänzung	E ₆	Direktivergänzung
E ₂	Genitivergänzung	E ₇	Einordnungsergänzung
E ₃	Dativergänzung	E ₈	Artergänzung
E ₄	Präpositionalergänzung	E ₉	Ergänzungssatz

- | | | | |
|-----|--|------|--|
| - | <i>Es taut.</i> | 1 | <i>Es gibt keine ideologiefreie Wissenschaft. Mich friert./Es friert mich.</i> |
| 0 | <i>Johanna fiebert.</i> | 01 | <i>Pinkus pfeift den Kaiserwalzer.</i> |
| 02 | <i>Er entledigt sich seiner Kleider.</i> | 011 | <i>Sie lehrt ihn eine neue Sprache.</i> |
| 03 | <i>Streuwalze schaden den Fahrzeugen.</i> | 012 | <i>Man beschuldigt ihn der Unaufmerksamkeit.</i> |
| | | 013 | <i>Er sagte ihr, was er dachte.</i> |
| 04 | <i>Ich danke an dich.</i> | 0136 | <i>Uli bringt dem Vater die Mappe ins Büro.</i> |
| | | 014 | <i>Sie überredeten das Opfer zu einer angeblichen Spazierfahrt.</i> |
| | | 15 | <i>Hier gibt es das beste Brot der Welt.</i> |
| 05 | <i>Das Dorf liegt an der Autobahn.</i> | 015 | <i>Sie verbrachten drei Tage im Elsaß.</i> |
| 06 | <i>Wir fahren nach Bamberg.</i> | 016 | <i>Sie brachte ihr Gepäck an den Flughafen.</i> |
| 07 | <i>Dieser Mann ist ein Spion.</i> | 017 | <i>Man nennt ihn einen Duckmäuser.</i> |
| 08 | <i>Dieser Mann ist gefährlich.</i> | 018 | <i>Man nennt ihn zwielichtig.</i> |
| 09 | <i>Er ließ die Kinder ein Lied singen.</i> | | |
| 34 | <i>Mir graut vor dir.</i> | | |
| 034 | <i>Man riet ihm zum Nachgeben.</i> | | |
| 036 | <i>Sie halfen ihm aufs Pferd.</i> | | |
| 038 | <i>Man war ihm unfreundlich begegnet.</i> | | |
| 044 | <i>Sie sprachen mit den Nachbarn über Utas Haus.</i> | | |
| 47 | <i>Es ist ein Elend mit ihm.</i> | | |
| 48 | <i>Es steht nicht gut um unsere Pläne.</i> | | |
| 048 | <i>Man ging noch recht sanft mit ihm um.</i> | | |

lernen

- | | | | |
|-----------------------------------|-------|----|--|
| <i>lernen (aus - Dat)</i> | O(1(4 | P1 | <i>Ich habe (viel) (aus meinen Fehlern) gelernt.</i> |
| 1:SE mit fakultativem Korrelat | INF+: | | <i>Ich habe <es> aus meinen Fehlern gelernt, vorsichtig zu sein.</i> |
| | DASS: | | <i>Ich habe <es> aus meinen Fehlern gelernt, daß man vorsichtig sein sollte.</i> |
| | FRAG: | | <i>Ich habe <es> aus meinen Fehlern gelernt, wie man sich richtig verhalten muß.</i> |
| | HPTS: | | <i>Ich habe <es> aus meinen Fehlern gelernt, ich muß mich anders verhalten.</i> |
| 4:SE mit obligatorischem Korrelat | DASS: | | <i>Peter hat nichts daraus gelernt, daß er schon drei Unfälle hatte.</i> |
| BEMERKUNG: | | | E ₁ meist indefinit oder SE. |
| <i>lernen (von - Dat)</i> | O(1(4 | P1 | <i>Peter lernt (das Spanen) (von seiner Mutter).</i> |
| 1:SE ohne Korrelat | INF-: | | <i>Peter lernt Spanisch sprechen.</i> |
| | HPTS: | | <i>Peter lernte, Spanisch sei eine romanische Sprache.</i> |
| 1:SE mit fakultativem Korrelat | DASS: | | <i>Peter hat <es> in der Schule gelernt, daß Spanisch eine romanische Sprache ist.</i> |
| | FRAG: | | <i>Peter lernte <es> in der Fahrschule, wie ein Motor funktioniert.</i> |

最後に結合価理論をもう一步進んで発展させて、結合価レベルと格支配レベルとの対応を記述したのがSHUMACHER (1986) の "Verben in Feldern. Valenz wörterbuch zur Syntax und Semantik deutscher Verben" である。この辞書に出る動詞 kaufen の記述を見られたい。

	KAUFEN	
	kauft - kaufte - hat gekauft	
SBP	kaufen	NomE AkkE (PräpE von) (AdvE)
S+P	Der a _{NomE} kauft (von dem x _{PräpE}) den z _{AkkE} (um den k _{AdvE}).	a bewirkt absichtlich und um die Gegenleistung von k, daß es dazu kommt, daß a den z besitzt und x den z nicht mehr besitzt
BelE	NomE	a: handlungsfähiges Individuum/ Kollektiv von Menschen/ Institution
	AkkE	z: konkretes Individuum/ Substanz
	PräpE: PräpG von + NG im Dat	x: Mensch/Kollektiv von Menschen/ Institution
	AdvE: AdvG PräpG für/um + NG im Akk zu + NG im Dat	k: Entgelt
Ann	<p>- Wenn z ein Mensch ist, wird dieser häufig als Ware betrachtet: <i>Im antiken Rom konnte man Sklaven aus vielen Ländern kaufen. Neuerdings wird das Verb auch für den Transfer von Berufssportlern (insbesondere Fußballspieler) verwendet: Italienische Vereine sind daran interessiert, Nationalspieler aus anderen Ländern zu kaufen.</i></p> <p>- Beim Bezug auf Immobilien und Wertpapiere kann die AkkE fehlen. Sie kann auch wegfallen, wenn z durch den x indirekt charakterisiert wird: <i>Wir kaufen meist direkt vom Winzer.</i></p> <p>- Statt der PräpE kommt häufig eine AdvG vor, die den Ort der Kaufhandlung bezeichnet und indirekt den Verkäufer charakterisiert: <i>Lebensmittel kaufen wir meist im Supermarkt/bei Herten/auf dem Markt.</i></p> <p>- Häufig wird eine freie DatG oder PräpG für + NG im Akk hinzugefügt, mit der ausgedrückt wird, für wen das Kaufobjekt bestimmt ist: <i>Peter und Jutta haben sich ein neues Boot gekauft. Elfriede will für ihre Söhne neue Trainingsanzüge kaufen.</i></p>	

passK	<p><i>werden</i> - Passiv Der z wird (von dem x) (von dem a) (um den k) gekauft.</p> <p><i>sein</i> - Passiv Der z ist gekauft.</p> <p><i>bekommen</i> - Passiv Jmd. bekommt den z (von dem a) gekauft.</p>
Anm	<p>- Aus stilistischen Gründen werden x und a beim <i>werden</i>- und <i>sein</i>-Passiv nicht gleichzeitig genannt. Beim <i>bekommen</i>-Passiv fehlen x und k.</p> <p>- Das <i>kriegen</i>-Passiv ist auch üblich; das <i>erhalten</i>-Passiv ist möglich.</p> <p>- Beim <i>bekommen</i>-Passiv entspricht dem Subjekt des Passivsatzes im Aktivsatz ein freier Dativ.</p>
TextB	<p>Zwei Privatsammler aus den USA haben für insgesamt 828000 Mark je ein Bild gekauft. (Welt, 17.2.1966, S. 1)</p> <p>Der Vertrag sieht vor, daß die Bundesregierung das Schiff kaufen muß, wenn sie es länger als ein Jahr in Anspruch nimmt. (FAZ, 10.2.1966, S. 1)</p> <p>Was kannst du dir für, sagen wir, achthundertfünfzig Francs alles kaufen [...]. (Mann, Krull, S. 187)</p> <p>Er hat damals sein Haus zu einem äußerst günstigen Preis von einer Erbengemeinschaft gekauft.</p> <p>Im Sommerschlußverkauf kann man Badeanzüge und Sommerkleider oft billig kaufen.</p> <p>Die beiden Bilder rechts neben der Tür sind von einem Kunsthändler gekauft worden; die anderen können Sie noch bekommen. <i>werden</i> - Passiv</p> <p>Von England werden nur noch solche Waren hereingelassen, die bereits gekauft und voll bezahlt sind. (FAZ, 31.1.1966, S. 1) <i>sein</i> - Passiv</p> <p>Im Frühjahr bekommen die Kinder regelmäßig neue Schuhe gekauft. <i>bekommen</i> - Passiv</p>
Wend	<p><i>Dafür kann ich mir nichts kaufen.</i> i.S.v. <i>Das nützt mir nichts.</i>; <i>die Katze im Sack kaufen</i> i.S.v. <i>etw. ohne vorherige Prüfung erwerben</i></p>
WortB	<p>der Käufer, der Kauf; käuflich; abkaufen [s. Vorspann], ankaufen, aufkaufen, einkaufen, freikaufen, leerkaufen, loskaufen, zukaufen, zurückkaufen, zusammenkaufen</p>
and Bed	<p>(1) <i>etw. kaufen</i> i.S.v. <i>die Nutzungsrechte an etw. erwerben</i>: <i>Mehrere Firmen haben das Patent des Erfinders gekauft.</i></p> <p>(2) <i>jmdn. kaufen</i> [umgangssprachlich] i.S.v. <i>jmdn. bestechen</i>: <i>Die Zeugen in dem Prozeß waren alle gekauft.</i></p>

一方、ドイツ語の結合価理論の最大の問題点とされる補足成分と添加成分との判定基準として削除テストをはじめ、様々な統語テスト手段が提唱されてきたが、成田(1994)はこれらの統語テストを①「命題」の外にある添加成分 ②動詞の下位クラス(a. 動詞置き換えテスト b. 文成分の形態 c. 任意な付加の可能性 d. 重複の可能性を含む) ③動詞との結合の強さに基づくもの(a. 副詞類の語順 b. nichtの位置) ④動詞の意味から前提とされる成分(a. 対話テスト b. Schumacherの「Implikations test」を含む)と4つのグループに分類し、その有効性を否定したうえで、Welke(1988)の結合価モデルを検討した。Perspektiveの概念による「基本結合価・結合価縮小・結合価拡大」を導入したこの結合価モデルにおける「見方」に基づいての「意味上の必要性」が(量的)結合価の根底にある要因だと氏は考えている。

これに先立って、在間(1990, 1994, 1995)は統語構造の意味機能に関する一連の論考で、ドイツの結合価研究が文成分の「削除性」を出発点に、動詞と統語構造との結合に関する多大な成果をもたらしたことを認めながらも、文意味構造の形成に動詞ばかりでなく、4格目的語など文成分による統語構造も関与し、そして動詞と意味的に整合しつつ、『消極的』に意味機能を担う統語構造もあるし、現実界の出来事に話者の関わりが色濃く反映される「拡大パターン」あるいは「縮小パターン」の形で動詞よりも『積極的に』意味機能を担う統語構造もあると敷衍した上で、「言語理論」としての結合価理論の限界を示唆している。

もっとも成田の「意味上の必要性」と在間の積極的な意味機能を担う統語構造の「拡大パターン・縮小パターン」を突き合わせてみれば、両氏は表現主体の話者の認識態度が現実界の出来事に大きく関与する点で共通していることが分かる。

0.2.4 日本

文の統語構造には①文を主語と述語に二分し、述語をさらに構成要素に分解していくモデルと②文の中核に述語を据え、この述語にいくつかの名詞句や副詞句が依存していると考えられるモデルとの二種類がある。伝統的な文法は第一のモデルに属するものがほとんどであるが、三上章・寺村秀夫らの文法理論や格文法や結合価理論は第二のモデルと位置づけられていると考えられる。注意すべきは結合価理論をもう一步進んで発展させた旧ソ連の単語結合理論に基づいて、奥田靖雄を中心とした「連語論」の詳しい研究が行われている点である。

第二のモデルでは主語の特殊性を認めながらも、目的語や副詞句に対する従来の主語の優位性の概念を一掃し、主語と同じく目的語や副詞句などを平等に扱うことで共通している。日本では1960年代の末から佐久間鼎をはじめ、石綿敏雄・村木新次郎・仁田義雄らによって、結合価理論が紹介されて導入された。これは動詞・形容詞・形容動詞という用言の格支配つまり用言がどんな「名詞+格助詞」をいくつ支配するかという日本語の表層構造上の特性を記述するのに有効なので、ただちにその研究成果に基づいて、自然言語処理ないし辞書記述に応用されている。もっとも辞書記述には深層構造の意味役割を重視するFILMOREの格文法は好適だが、この格文法は格の数と格の内容をめくり、学者の意見が対立したまま、今日に至っているのである。

実際FILMOREは当初は6個の格を想定していたが、「必要があれば、追加される」と考えたため、結局①動作を起こす動作主格②体験をする経験者格③原因・手段・刺激になる道具格④変化する対象の内容となる対象格⑤起点を表す源泉格⑥終点を表す目標格⑦場所を表す場所格⑧時間を表す時間格⑨経路を表す経路格などの9種類の格を提出してしまった。当然ながら、現段階の自然言語処理の実用化ないし辞書記述に関しては統語構造の解析が主、意味構造の解析が従のような安定性が比較的高い結合価理論のほうがより効果的であろうが、のちにいささか修正された形で格的意味の概念を取り入れた結合価理論は再登場するのが現状である。

石綿ら(1983)は文を用言と名詞句の共起関係でとらえるには①表層のレベルでとらえる結合価パターン②深層のレベルでとらえる格支配パターンの2つのレベルがあるとして、具体的に次の例を挙げて、両者の関係を敷衍している。

例	社長側が	その結婚式を	派閥争いに	利用した。
結合価レベル	N[hum]ガ	N[abs]ヲ	N[act]ニ	V
格支配レベル	Agent(hum)	Object(abs)	Purpose(act)	V

なお石綿ら(1933)の日本語用言の結合価表には1154語の用言の結合価がリストアップされている。作成に当たっては、①意味カテゴリーの決定②格助詞の決定③用言の抽出④用例の調査⑤結合価パターンの記述などの手順が踏まれている。ここでは詳しい説明を省略して、意味カテゴリーだけを次のように示しておく。

abs(trait)	「抽象概念」
act(ion)	「行為」
ani(mal)	「動物」
con(cret)	「具象物」
div(ers)	「種々」
hum(ain)	「人間」
loc(calite)	「場所」
num(nombre)	「数」
mat(iere)	「材料」
temps	「時」
s	「文」

ちなみに動詞「教える」に関する記述は次のようである。

教える	N[hum]が+N[hum]を+V
	N[hum]が+N[abs]を+N[hum]に+V
	N[hum]が+N[hum]+Sと+V

この結合価表には検討の余地があるので、本書の第3章と第6章に譲る。

一方村木(1991)は結合価理論を踏まえながら、日本語の格形式の特殊性を考慮に入れて、叙述素という概念を導入して、日本語の動詞文の構造を分類し類型化し

ようと試みた。叙述素は名詞の格形式と、名詞と動詞の間になりたつ意味的な関係をまとめて表示し、シンタグマや文の統語構造（形式）と意味構造（内容）を統合するものである。村木の場合、叙述素は意味素や形態素に似た意味で、言語に対する認識や叙述を構成するもっとも意味的な基本単位として、次のように分類されている。

- I 場所に関する叙述素
- II 抽象的關係をあらわす叙述素
- III 原因・目的に関する叙述素
- IV 変化・作用に関する叙述素
- V その他（I～IV以外）の叙述素
- VI <全体-部分>の關係
- VII <主人-側面>の關係

なお村木は名詞の範疇的意味を次のように分類している。

- hum (ヒト)
- con (具象語)
- abs (抽象語)
- act (事象)
- loc (空間)
- tim (時間)
- qua (数量)
- div (雑多)

情報処理振興事業協会技術センターがいち早く村木を中心とした研究グループの理論を実用化した。その成果が1987年に刊行された『計算機用日本語基本動詞辞書IPAL (Basic Verbs)』解説編と辞書編との二巻である。これは結合価理論を発展させ、名詞の意味素性と格的意味を両方とも記述しようと試みた最初の動詞結合価辞典と言えよう。これに続いて、『計算機日本語基本形容詞辞書IPAL (Basic Adjec-

tives)』が1990年に、『計算機日本語基本名詞辞書IPAL (Basic Nouns)』が1996年に出版されてきた。もっともこれらの辞書は編纂性質上一般の人ではなく、研究者に向いているようである。注意すべきは名詞の意味素性と格的意味に関してはこの辞書と村木とは次のように若干の記述が異なるという点である。特に「述語素」と「叙述素」との用語の違いが目立っている。

- I 場所に関する述語素
- II 抽象的空間を表す述語素
- III 原因・目的に関する述語素
- IV 変化・作用に関する述語素
- V その他
- VI 全体一部分の関係

CON(crete).....	具体名詞
ANI(mal) (+con).....	動物
HUM(an) (+con, +ani).....	人間
ORG(anization) (+con).....	組織・機関
PLA(ant) (+con).....	植物
PAR(tis) (+con).....	生物の部分
NAT(ural) (+con).....	自然物
PRO(ducts) (+con).....	生産物・道具
PHE(nomenon).....	現象名詞(自然/生理)
ABS(tract).....	抽象名詞
ACT(ion) (+abs).....	動作・作用
MEN(tal) (+abs).....	精神
LIN(guistic products) (+abs).....	言語作品
CHA(racter) (+abs).....	性質
REL(ation) (+abs).....	関係
LOC(ation) (+abs).....	空間・方角
TIM(e) (+abs).....	時間

QUA (n)lity) (+abs) 数量

DIV (erse) (制限緩やか)

なお解説編と辞書編に出る動詞「教える」の記述を見られたい。

- 教える N1ガN2ヲN3ニ (N4デ) ◇彼は老人に駅へ行く道を地図で教えた。
- N1ガN2ヲ ◇先生がたくさんの生徒を教えている。
- N1ガN2ヲN3 ◇この労働争議は我々に教訓を教えた。
- N1ガN2ニトS ◇住職は皆に「人はほめ合わねばならん」と教えた。

おしえる 下- osie

- 1【教える】他(統)(文) N1ガN2ヲN3ニ (N4デ) 「彼は老人に駅へ行く道を地図で教えた。」 「S先生は学生にチョムスキーを原書で教えている。」 (述) PTn, O2, IN, (PAgd), A (名1) N1ガ [HUM/AN1] 彼/水島 (名2) N2ヲ [ABS] 秘密、道、こつ、時間、数学、英会話、英語、ハムレット、差、生け花、運転、泳ぎ (名3) N3ニ [HUM/AN1] 息子/ひな (名4) (N4デ) [PAR/LIN/ACT] 目、口、体/原書、地図/身振り (意) (意記) 知識や技術などを相手に伝えて、身に付けさせる。(上) 知らせる、伝える (類) 諭す、導く、告げる (反) 教わる、習う、学ぶ、聞く (国分) 教育: 2.364 (角分) 教育: 4.55a (分) 動作 (動き), (状態) 変化 知覚・思考、授受、言語活動、社会活動 (形) (派便) おしえさす (転名) おしえ (転動) おそわる (文法) (態) ニ使役、直受ニ; ニ、カラ | 直受ヲ; カラ、ニヨッチ、間受、可能、尊敬: 能動 (時相) 未来、進行、テアル、テシマウ、カケル、ハジメル、ダス、ツツケル (法) 命令、意志・勧誘、タイ・タガル、ナサイ、ナ (禁止): 3b | マス、ナイ
- 2【教える】他(統)(文) N1ガN2ヲ 「先生がたくさんの生徒を教えている。」 (述) O2a, A (名1) N1ガ [HUM] 先生 (名2) N2ヲ [HUM] 生徒、学生、子供 (意) (意記) 師として誰かを教育する。(上) 導く (類) 諭す (反) 教わる、習う、学ぶ (国分) 教育: 2.364 (角分) 教育: 4.55a (分) 動作 (動き), (状態) 変化、移動 (位置変化)、授受、社会活動 (形) (派便) おしえさす (転名) おしえ (転動) おそわる (文法) (態) ニ使役、直受ヲ; ニ、カラ、間受、可能、尊敬: 能動 (時相) 未来、進行、テシマウ、カケル、ツツケル (法) 命令、意志・勧誘、タイ・タガル、ナサイ、ナ (禁止): 3b | マス、ナイ
- 3【教える】他(統)(文) N1ガN2ヲN3ニ 「この労働争議は我々に教訓を教えた。」 「歴史の教える所の教訓をよく考えよ。」 (述) PTn, O2, O1 (名1) N1ガ [ACT] 事件、労働争議、歴史 (名2) N2ヲ [ABS] 教訓、問題の複雑さ (名3) N3ニ [HUM] 彼、人々 (意) (意記) ある事を知らせる、明らかにする。(上) 伝える (類) 示す、知らせる (反) 教わる、学ぶ (国分) 教育: 2.364 (角分) 教育: 4.55a (分) 動作 (動き), (状態) 変化、移動 (位置変化)、知覚・思考、授受 (形) (転名) おしえ (転動) おそわる (文法) (態) x、直受ニ; カラ、ニヨッチ、間受、可能: 能動 (時相) 未来、経験・完了、x (法) x、推量、ナ (願望): 1 | マス、ナイ
- 4【教える】他(統)(文) N1ガN2ニトS 「住職は皆に「人はほめ合わねばならん」と教えた。」 「私は父に自分の道を生きるように教えられた。」 (述) LG1, PTn, CTs, A (名1) N1ガ [HUM] 父 (名2) N2ニ [HUM] 子 (名3) Sト [-] 鞭を突いてはいけない、心正しく生きる (意) (意記) ある教訓を与えて相手を導く。(上) 導く (類) 諭す (国分) 教育: 2.364 (角分) 教育: 4.55a (分) 動作 (動き), 知覚・思考、言語活動 (形) (派便) おしえさす (転名) おしえ (転動) おそわる (文法) (態) ニ使役、直受ニ; ニ、カラ、間受、可能、尊敬: 能動 (時相) 未来、進行、テシマウ、カケル、ツツケル (法) 命令、意志・勧誘、タイ・タガル、ナサイ、ナ (禁止): 3b | マス、ナイ (備考2) SトはSヨウニと交替可。

仁田(1980)は『語彙論的統語論』で「Lexico-Syntax」について次のように述べている。

筆者が本書で展開しようとしているLexico-Syntaxに部分的に関連を有しているものとしては、フィルモアの格文法やテニエルやヘルビヒの依存関係文法がある。日本では、石綿敏雄の一連の研究や村木新次郎のいくつかの研究が近い関係にある。

筆者が本章および本書で提唱するLexico-Syntaxは実質語の語義から来るところの結合能力のあり方を重視することによって、統語論的事象と語彙論-意味論的事象との統合的記述を計り、その事によって、文法記述の包括性と自己充足性の拡大を計ろうとするものである。Lexico-Syntaxの中核概念は、〈結合価〉という概念である。結合価という概念は、語詞が主要素(governor)として機能する時、その語詞の語義のあり方によって、その語詞と共存的に生起して整合的な連語や文を作る従要素(dependent)のクラスの種類と数、および、その従要素に属する実質語の意味特性が、決まっている、という仮説に基づいている。その共存的生起を指定されるところの従要素のクラスは、主要素との意味論的な関係のあり方を体現するクラスとして、その共存的生起を指定されることになる。Lexico-Syntaxは、語詞の可能性としての結合能力のあり方を、結合価という形式で、語詞に記載しておくことによって、現に存在している所与の文の解析のみならず、将来起こりうるかも知れない、その語詞を主要素とした連語や文を予測しようとするものである。

また1988年の再版の本書に追加された次のような参考文献は「本書の初版以後に出た語彙論的統語論の姿勢・観点から書かれた筆者の論文」だと仁田が自ら強調している。

1982a 「再帰動詞・再帰用法」『日本語教育』No.47

1982b. 「格の表現形式-日本語-」『講座日本語学10』(明治書院)所収

1982c. 「語彙と文法」『講座日本語の語彙1』(明治書院)所収

1982d. 「動詞の意味と構文」『日本語学』Vol.1, No.1

- 1983a. 「結果の副詞とその周辺」『副用語の研究』（明治書院）所収
- 1983b. 「動詞とアスペクト」『計量国語学』Vol. 14, No. 3
- 1983c. 「アスペクトについての動詞小レキシコン」『ソフトウェアのための日本語処理の研究』No. 5（情報処理新候新興事業協会）
- 1986 「格体制と動詞のタイプ」『ソフトウェアのための日本語処理の研究』No. 7
- 1988a. 「動詞の文法的諸側面の相互交渉」『ソフトウェアのための日本語処理の研究』No. 9
- 1988b. 「意志動詞と無意志動詞」『言語』Vol. 17, No. 5

仁田の一連の論考で特に注目すべきは「日本語の格を求めて」（1993）において初めて結合価理論の最大の問題点とされる必須成分の具体的な判定基準として①主題化②連体修飾節の主要語化③分裂文の焦点部分④付加・削除の制約などの四つのテスト手段を取り上げて、必須成分の判定テストへの新しい研究の第一歩を後ればせに踏み出と同時に、格的意味を①主②対象③相方④基因⑤出どころ⑥ゆく先⑦ありか⑧経過域などの8種類に分類したという点である。もっともこれらのテスト手段はいずれも決定的な判定基準にならない暫定的なものだと思う。ちなみに趙（1994）は「節の必須成分」は決まって「名詞句の必須成分」が存在することを前提として、成立するという必須成分の階層性を指摘した。

なお小泉ら（1989）の『日本語基本動詞用法辞典』では格的意味を排除して、専ら名詞の意味素性だけを考慮に入れ、動詞756語を記述するようになっている。動詞「教える」に関する記述は次のとおりである。

おしえる 教える

【意味・文型】(1)学問・知識・技艺・方法などを知っている者がそれを知らない者に伝える。または、必要な情報を知らせたりする。

《文型a》[人・組織] {が／は} [人・生き物] に [事] を教える

『先生は子供たちにローマ字を教えた・親が子に人の生き方を教える・学校は生徒にいろいろな知識を教える・友達に秘密 [こつ／数学／運転／泳ぎ／電話番号] ・外国人に駅へ行く道を身振りて教える・犬に

芸を教える

《文型b》 [事] {が／は} [人] に [事] を教える

¶過去の歴史が私たちに人類の愚かさを教えている・今回の台風が再び自然の恐ろしさを住民に教えた

《文型c》 [人] {が／は} [人] に文と教える

¶彼女は私に「先生が来たわよ」と教えてくれた・父はうそについてはいけないと子供たちに教えた

《文型d》 [人] {が／は} [人] に文よう(に)教える

¶父は私に強く生きるように教えた・危険なときはブレーキを強く踏むように教える

《文型e》 [人] {が／は} [人] を教える

¶真由美は小学生を教えている・ベテラン教師が新米教師を教える

【文法情報】

〈受身〉 [直接] あの先生から学問の面白さを教えられた

[間接] 子供に間違っただけを教えられた【《文型b》は不自然
】

〈使役〉 校長が先生に英語を小学生に教えさせた

〈可能〉 この程度の事は私にも教えられる【《文型b》不可】

〈相〉 [テイル形] 子供が通行人に道を教えている(動きの最中)・過去の歴史が我々に人類の愚かさを教えている(経験・完了)

[テアル形] 私の住所を教えてある(有効性の持続)

〈意志〉 英語を教えよう【《文型b》は不可】

〈命：禁〉 道を教えろ；うそを教えるな【《文型b》は不可】

【語形】

〈否定〉 おしえない

〈運用〉 おしえ

〈過去〉 おしえた

〈中止〉 おしえて

〈条件_i〉 おしえれば

〈条件₂〉おしえたら

【複合動詞】

教え込む […に…を] : 技芸などをよく覚えるまで教える。『犬に芸を
教え込む

【類語】教育する、指導する

一方、奥田の一連の「連語論」に関する論考で特に注目すべきはおそらく「言語の単位としての連語」（1978）という論文であろう。これは奥田自身が旧ソ連の言語学者VINOGRADOVの「単語結合」の概念に「連語」という訳語を与えて、日本語の「連語論」研究の基礎を固める基本文献と言える。つまり、「単語結合」とは2つあるいはそれ以上の自立的な単語の結合によって、従属的な文法的関連——一致・支配・接続——の基礎の上に作られる統辞論的構造であるというVINOGRADOVの定義に基づいて、奥田は自らの「連語論」を展開してきたのである。奥田の場合、用語の違いこそあれ、この従属的な単語結合だけを「連語」とみなす見解のもとで、次のような記述がなされている。

連語はふたつ、あるいはみっつの単語からなりたっていて、そのうちのひとつが核になっている。その核になる単語の語彙的な意味をせばめて、具体化するというし方で、ほかの単語が核になる単語にくみあわせる。したがって、連語は、語彙的な意味の具体化をもとめて、ほかの単語をしたがえる《かざられ》と、そのかざられによりかかる《かざり》との、ふたつの構成要素からなりたっている。

奥田にとって、あるかざられ動詞が自らの語彙的な意味を狭めて、具体化することはこの動詞が他のかざり名詞と組み合わせることを求めることを意味する。そして、いくつかの動詞は本来の語彙的な意味の全体ではなく、狭められて具体化されたある語彙的な意味の側面を同様に有することで、共通な構造的な結び付きを持つ一般化ができる。この点では先駆者のV. V. VINOGRADOVの立場を超えていない。だが、次のような記述で分かるように、構造的な結びつきは一旦成立したら、逆にある単語の語彙的な意味の変更・修正・追加に関与するという奥田の見事な指摘を看過す

るわけにはいかない。

ところで、この構造的なむすびつきは、つねに構成要素の構文論的な特性によって作りだされているとすれば、構成要素にたいして受動的である。しかし、ひとたびできあがった構造的なむすびつきが、ぎゃくに構成要素である単語の語彙的な内容にはたらきかけて、その変更・修正・あるいは追加をもとめるとすれば、この構造的なむすびつきは、構成要素にたいして積極的でもあって、相対的な意味における独立性を主張する。構造的なむすびつきを実現する、連語の構造的なタイプは、いろいろの構成要素＝単語にたいしては、あたかも独立的な存在のごとくである。

ちなみに動詞「教える」は次のように奥田（1983）の「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」では《よびかけ動詞》と《通達動詞》との二つの構造的な結びつきグループに属して現れる。参考のために同じ奥田（1983）の「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」では動詞「教える」は《言語活動動詞》の構造的な結びつきグループに属するが、《通達動詞》と《言語活動動詞》とでは用語こそ違え、記述内容に関してほとんど差異が見られないことを断っておく。

よびかけのむすびつき：あおる・うながす・「おしえる」・おだてる・くどく・けしかける・せがむ・せがむ・せきこむ・せきたてる・せびる・たのむ・といただす・そそのかす・よぶ・まねく・さそう（p. 58）

通達のむすびつき：いう・はなす・かたる・ものがたる・のべる・しゃべる・つげる・うったえる・しらせる・うちあげる・わびる・とく・とう・といただす・たずねる・ぐちる・ほのめかす・ふれちらす・ぶちまける・こぼす・「おしえる」・告白する・白状する・説明する・報告する・かく・したためる・みとめる・記述する・記録する・きく・うけたまる・うかが

う・おそわる・よむ・議論する・相談する (pp. 109-110)

言語活動のむすびつき：いう・はなす・かたる・しゃべる・…のべる・つげる・とく・うったえる・うちあける・わびる・つたえる・しらす・しらせる・とう・といただく・たずねる・こたえる・くちる・ほのめかす・ふれちらす・ぶちまける・「おしえる」・おっしゃる・ぬかす・申す・申しあげる・申しわたす・申したてる・申しこむ・告白する・白状する・説明する・力説する・概説する・論ずる・議論する・報告する・発表する・公表する・表明する・主張する・きく・うけたまる・おそわる・よむ・かく・したためる・みとめる・記述する (p. 231)

ところで取り上げるべきもう一冊は城田(1991)の『ことばの縁—構造語彙論の試み』であろう。これはMEL'CUKとZHOLOVSKYの「語彙関数」(lexical functions)を踏まえながら、「単語結合」の概念を「縁語」という訳語に与えて、日本語のそれに適用した解説書と言えよう。動詞「教える」に関する記述は次のとおりである。

[シテ名] 教える = 先生・教師・教え手。

[ツレ名] 教える = 生徒・学び手

最後に用例に基づく単語結合ようなものを抽出する林ら(1992)の『15万例文・成句 現代国語用例辞典』と、日本語学習者向けの阪田ら(1995)の『日本語を学ぶ人の辞典』に出る動詞「教える」の記述に触れると同時に、いまだにまだ完成していないが、国広ら(1982)では柴田武・山本進・国広哲弥三氏の描いた理想的な辞書記述がなされている。

おし・える【教える】○知識や技術を与えて、身に付けさせる。物事を知るようにさせる。さとしし＜数学を教える＞大学を卒業後、兄は中学校で数学を教えています。◆＜芸を教える＞野性の動物に芸を教えるのは、なかなか難しいものだ。◆＜名前を教える＞散歩をしながら、父はよく鳥や草の名前を教えてくれた。◆＜道を教える＞ちょっとお尋ねします。駅への道を教えていただけませんか。◆＜秘密を教える＞ぼくの秘密、人に教えないと約束できるかい？◆＜時刻を教える＞大通りのフル時計が人々に時刻を教えるようになってから、もう五十年にもなる。◆＜負うた子に教えられて浅瀬を渡る＞◆自分より経験の少ない者から教えられることのたとえが「負うた子に教えられて浅瀬を渡る」です。

おし・える【教える】おしえる《他動詞一》①知識や技術などを人に広めて身に付けさせる<E>teach<中>教、訓練「母は学校で数学を教えている」《対》習う、学ぶ

②自分が知っていることを人にわからせる<E>tell, show<中>告訴「あなたの住所と電話番号を教えてください」/駅へ道を教える」③人の生き方などについて、教訓を与える<E>give a lesson<中>指導、教訓「人間として守るべき道を子供たちに教える」

◇《名》教え

kimeru (決める) [他一] 1 一定の状態を動かしたり変えたりしないように固定する。「計画を－/鬼を－/芥川賞を－/勝負を－(＝勝つか負けるか、はっきりさせる [⇨勝つまたは負けるという結果を動かしたい状態に固定する]) / ストライクを－(＝みごとにストライクをとる [⇨ストライクという結果を動かしたい状態にする]) / ずるを－(＝人に何といわれようと、ずるの状態を続ける) / 差し手を－(＝相撲で、相手が差し込んだ腕や手首をはさんで、しめつけ、動けなくする)」2 (kime-te の形) この状態は動かしたり変えたりできないものと考えてしまって。「賛成と－かかる/助からないと－あきらめる《類》sadameruと比べると、kimeruが固定する(考えてしまう)のに対して、sadameruは、固定した状態を維

持しようとするのである。「芥川賞をkimeru」は、複数の候補者のうちから選んで、選んだあとは、その状態を変えないように固定することであり、「芥川賞をsasameru」は、芥川賞という固定した制度を維持することである。《造》とりー。(柴田による)

こす【越す】(動詞5) 1『AがBをこす』〈Aの数量が〔尺度上での基準点〕

Bを通過する〉-「身長が2メートルを越す大男」「深夜はどの車も制限速度を越して走っている」「熱が40度を越した」

2 〔人間・動物〕Aが〔時期〕Bを過ごし、次の時期を迎える〕B: 冬、年(⇒この2語ないしこの意味を含む表現だけに限られる)-「長い冬を越す」「この調子じゃ楽に年を越せそうもないね」

3 〔人間〕Aが〔その進行方向にあって障害となる場所〕Bを通過する(⇒これを具体的移動に使うのは古い用法で、現代語では慣用句にのみ使われる)-「難関を越す[=困難な事態を切り抜ける]」「彼はとつづく60の坂を越している[=60歳を過ぎている]」

Cに越したことはない〔ことがら〕Cが一番良い)-「何事も自分で確かめるに越したことはない」)

【表記】1は「超す」と書くこともある。

【類語】1, 3⇒こえる。2⇒すごす。

およぶ(略) すぎる(略)

とどく(略) すごす(略) (山本による)

ずれる ズレル(zure-母音語幹・自)

1 物が同一平面に接したまま、期待されている合致状態からわずかに平行移動する。|| この印刷は色がずれている/コンタクトレンズがずれて困る。

2 《転用》|| その時の飛行機(のコース)は(所定の)コースを大きくずれていた(=通常)のコースを遠く離れながらも平行して飛んでいた/彼のセンスは(われわれとは)ずれているんだから、どうしようもないよ(=彼なりのセンスはあるのだが、われわれのセンスとは全体が少

し違っている) ⇨ 基準にされている方が標準的であるという評価が含まれている / AグループとBグループの日程は一日ずれている (⇨この用例では評価の差は含まれていない)。(国広による)

0.2.5 旧ソ連

上述の旧ソ連のゲルマン語学者ADMONIと同様、旧ソ連の言語学者MEL'CUK (1964)は結合価のある形式を強く支配するという中核成分の能力として捉え、あらゆる品詞に諸形式の意味・等位あるいは従属などの結合価の能力を持たせるとした上で、後日の「語彙函数」(lexical function)ないし「語彙的意味論」(lexical semantic)を自ら展開させた。

こうした中で、旧ソ連の言語学者は結合価の概念をさらに拡大して、結合能力を動詞やすべての品詞に限らず、音韻論上の結合価・形態論上の結合価・統語論上の結合価・意味論上の結合価など様々なレベルの言語上の要素に適用しようとした。

まずV. V. VINOGRDOVの「単語結合」に関する知見は特筆大書すべきであろう。氏はVvedenie (序論1-26) (Akadejia nauk SSSR institut jazykoznanija Grammatika russkogo jazyka Tom II, Sintaksis, Časti' pervaja, Moskva, 1954,菅野裕臣訳)で次のように述べている。

形態論とは、単語の変化の規則、言いかえれば単語の形を作る規則を含み、また単語を作る規則をも含む、文法の2つの部分のうちのひとつであり、統辞論とは、形態論と緊密に結びつき、単語の結合の規則と文の形成 (sostavlenie) の規則を含む、すなわち単語結合の規則に関する学説と文に関する学説を叙述する文法のもうひとつの部分である。単語結合とは自立的品詞に属する単語2つあるいはそれ以上の連結によって作られ、なんらかの単一だが、分節された意味をあらわすような文法的単位である。文法的な観点からは単語結合は単純単語結合と複合単語結合に大別される。単純単語結合はその命名的 (nominativne) 統一、その意味的機能を失わずに、与えられた言語の法則によって他の単語によって拡大され、そして複雑化された形で新しい、一層分節された、具体化された、しかし、複合したとはいえ、単一の意味をあらわしている。複合単語結合は大部分の場合単純単語結合の拡大の産物である。単語結合の構成には①従位的単語結合 (slovosocetanija podčinitel'nye) — 一致・支配・接合の三つの手段によって作られるもの、②等位的単語結合 (slovosocetanija sočinitel'nye) あるいは系列・閉じられない結合た一等位接続詞によって、また列挙のイントネーションによって作られるものの2つの部類がある。

実際、質的に異なる「名付けの単位としての単語結合」と「伝達の単位としての文」の徹底した区別・単語結合の境界の明確な規定を打ち出したV. V. VINOGRDOVの理論はソ連の学者に大きい影響を与えたばかりでなく、「(1) もちろん独立語であるが、いくつかの、おおくのばあいふたつ、あるいはみっつの単語をくみあわせると、単語とおなじように名づけるにはたらく連語ができあがる。」「(4) ふつう、連語はふたつ、あるいはみっつの単語からなりたっていて、そのうちのひとつが核になっている。その核になる単語の語彙的な意味をせばめて、具体化するというし方で、ほかの単語が核になる単語にくみあわさる。」「(言語の単位としての連語)による(1978)などの断片的な記述でも分かるように、奥田靖雄を中心とした言語学研究会の理論づけに決定的な役割を果たした。

なお『現代ロシア語』(Sovremennyj russkij jazyk. Csat' N. Morfologija. Sintaksis, E. M. Galmcind-Fedoruk, Moskva, 1964)に出るBELOSHAPKOVA V. A.の「単語結合」(Slovosocetanie)ではV. V. Vinogradovを踏まえながら、単語結合の構成には等位的単語結合と従位的な単語結合との2種類があり、後者だけが支配・一致・接合の統辞論的な観点からさらに単純単語結合と複合単語結合に大別され、そして文の内部・文のさまざまな成分の間の相互作用と相互関係にのみ実現される陳述的關係において陳述的単語結合と非陳述的単語結合が区別されるとしている。

次に『ロシア語百科事典』(Russkij jazzy Enciklopedija, Moskva, 1979)に出るLOPATINA L. F.の「単語結合」(Slovosocetanie)に対する解釈を、正確を期するために、菅野(1992)から引用しておく。

「単語結合」とは、2つあるいはそれ以上の自立的な単語(前置詞・接続詞・間投詞を除く)の結合によって、従属的な文法的関連——一致・支配・連接——の基礎の上に作られる統辞論的構造である。単語結合は主要な構成素と従属的な構成素とからなり、主要な構成素によって名詞的単語結合・形容詞的単語結合・動詞的単語結合・副詞的単語結合に大体分類される。また単語結合には自由な単語結合と自由でない単語結合(従属的な構成素と主要な構成素との結合が固いもの)とがあるが、前者だけが文法論の対象となる。構造的観点からは単語結合は単純単語結合・複合単語結合・およびそれらの組合せがある。単

純単語結合には2項的単語結合（「本を読む」・「おもしろい本」）・3項的単語結合（「本を生徒にわたす」）・4項的単語結合（「本をロシア語から日本語を訳す」）があり、複合単語結合（一致・支配・連接の組合せによるもの。なお日本語には一致は存在しない）には例えば「はやく本を読む」の類があり、さらに単純単語結合と複合単語結合の組合せとしては例えば「はやくおもしろい本を読む」の類がある。単語結合は伝達の単位としての文とは異なり、文の基本的な特徴であるモダリティ・テンス・人称・伝達のイントネーションという統辞論的範疇を持たない。単語結合内部の語順は変わりうる。単語結合はロシア語文法学でさまざまに取り扱われてきたが、V. V. ウィノグラドフがほとんど最終的な結論を出した。

最後に『ソ連科学アカデミーロシア語文法第Ⅱ巻、1982（抄）菅野裕臣訳（東京外国語大学講義資料）』では次のように述べている。

単語結合の構成素は核心的（主導的）構成素と従属的構成素からなる。核心的構成素（sterzbevoj komponent）は自己の語彙＝文法的特性によって結びつきを予定する文法的に主導的な単語であり、従属的な構成素（zavisimyj komponent）は文法的に従属された単語の形である。単語結合の意味は単語結合の主導的構成素と従属的構成素の関係において形成される。主導的構成素は動詞的単語結合（glagol'nye）（核心的な単語は動詞）、名詞的単語結合（substantivnye）（核心的な単語は名詞－代名詞と数詞を含む）、形容詞的単語結合（ad'ektivnye）（核心的な単語は形容詞）、副詞的単語結合（narechnye）（核心的な単語は副詞）に分類される。副詞的な単語には核心的な単語が比較級である単語結合も条件付で属する。また単語結合には語彙的に限定されない自由な単語結合と語彙的に限定された不自由な単語結合とがある。統辞論的観点からみれば、単語結合に単純単語結合・複合単語結合・組み合わせられた単語結合との3つのタイプがある。一致か支配か接合かのいずれかの手段による2項的単語結合ないし3項的単語結合などは単純単語結合、一致と接合・一致と支配・接合と支配・支配と支配のいずれかの手段による単語結合は複合単語結合、そして固定しない組み合わせられた単語結合と固定した組み合わせられた単語結合

は組み合わせられた単語結合にそれぞれ属する。

単語の従位的な結びつきには一致（第一種の従属性の形式的表現）・支配（第二種の従属性の形式的表現）・接合（第三種の従属性の形式的な表現）などの手段がある。単語の従位的な結びつきに際して生じる諸関係は①客体的関係（ob'ektnye otnoshenija）（単語において名づけられる動作あるいは状態と動作が向けられた、あるいは状態が結びつけられた対象（広い意味で）との関係）②規定的関係（opredelitel'nye otnoshenija）（対象・現象・動作・状態・特徴が自己の外的あるいは内的な性質・特性・属性の側から規定される本来の規定的関係あるいは、さまざまな状況の特徴づけを受ける状況＝規定的関係）③情報の補足の関係あるいは補充的關係（otnoshenija informativnogo vospolnenija ili vospoln'ajushchie）（従属的な単語は客体的意味をも規定的関係をも持っていないが、主導的な単語を自己でもって内容的に必然的に補充する、すなわち主導的な単語とともに最小の情動的に充分な単語結合を作る関係）など3つの形であらわれる。

結びつきの義務性あるいは非義務性のさまざまな程度、そしてまた結びつきを限定するさまざまな条件は、生ずる関係の性格と結合して、強い従位的結びつきと弱い従位的な結びつきを区別するための根拠となる。

一致とは従属的な単語の形の主導的な形への、性・数・格あるいは数と格あるいは格だけにおける同化によってあらわされ、本来の規定的関係を意味する従位的結びつきであり、弱い結びつきに属する。ただ情動的に不十分な単語の場合一致は補充の意味を持つ規定的意味を含み、かくして強い結びつきの特徴を獲得する。

支配とは名詞の斜格形（無前置詞あるいは前置詞つき）の主導的な単語への連接によってあらわされ、補充的關係あるいは客体的関係あるいは混交した関係すなわち客体的＝補充的關係あるいは客体的＝規定的関係を意味する従位的結びつきであり、補充的關係あるいは客体的関係あるいはそれらの混交関係は強い支配に、客体的関係が規定的関係と混交した関係は弱い支配に属する。

接合とは2つの形において存在するが、その形の各々が独立した規定を受けようとする従位的な結びつきであり、狭義の接合（あるいは本来の接合）と広義の接合（格による接合）とがある。本来の接合とは従属的な単語として不変

詞すなわち副詞、不変化の形容詞そして不定詞・比較級あるいは副動詞があらわれる結びつきである。この際にさまざまな関係が生じうる。格による接合とは規定的意味を持った名詞の格の形（無前置詞あるいは前置詞つき）の（任意の品詞の）自立語への接合である。この際に規定的関係・主体的＝規定的関係が生じ、あるいは状況的な拡大辞を要求する情報的に不十分な単語の場合は状況的＝補充的關係が生じる。

主要な単語には従属的な形をなす単一 (odinochnye) の強い結びつきと動詞の特徴的な属性をなす二重 (dvoynye) の強い結びつきがある。

単語の従属的な結びつきの体系には同一の関係を異なる形式的な手段によってあらわすような相互交替的な結びつきいわゆる変異的な結びつき (variativnyye svjazi) が存在する。

グループの文法的主導 (grammaticheskoe glavenstvovanie gruppy) とは用いられた形の主導的なグループが分割しえない場合すなわち従属的な形が主要なグループに入りこむ単語のどれひとつにも独立して接続しえない場合のすべてのことである。2格の接合のグループ (dvoipadezhnoe primykaniye) は従属的な位置 (zavisimaja pozicija) にある形のグループで、このグループはあるいは分節されず、あるいは分節されるが、従属的な位置では全体的かつ個別の統辞論的単位としてふるまう。

動詞の従属的結びつきは支配と接合、名詞の従属的結びつきは一致と支配と接合、形容詞の従属的結びつきは支配と接合、副詞の従属的結びつきは支配と接合、比較級の従属的結びつきは支配、代名詞の従属的結びつきは一致と接合の統辞論的關係をそれぞれ持っている。

ところで菅野 (1993) 「朝鮮語単語結合辞典作製のために－ロシア語連語論の場合を参考に－」 (朝鮮語研究会第95回例会) では①朝鮮語の単語の結合性の特殊性を明らかにする②辞書の各単語の意味記述の方法を見なおすきっかけとする③学習を兼ねる必要がある④日本語訳をつけることにより、日本語の単語の結合性との比較がある程度可能となるなどの目的で、上述の旧ソ連の単語結合理論を踏まえながら、下記のイギリス・ドイツ・ロシア・日本・韓国の辞書を二種に分けて、その理論の拠所を一一分析・検討した。ちなみに下記のii. と i. との二点は後で追加し

たものなので、この論文では扱わなかった。

1. 動詞中心のもの

a. Sentence Patternにもとづくもの

- i. Hornby, "Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English"
初版1948

B. Valenz理論にもとづくもの

- ii. Gerhard Heibig, Wolfgang Schenkel, "Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben", 1969, Leipzig (331語)
- iii. Bernhard Engelen, "Untersuchungen zu Satzbauplan und Wortfeld in der geschriebenen deutschen Sprach der Gegenwart" (約3630語)
- iv. Ulrich Engel, Helmut Schumacher, "Kleines Valenzlexikon deutscher Verben", 1978, Tübingen (463語)
- v. 小泉保, 船城道雄, 本田島治, 仁田義雄, 塚本秀樹「日本語基本動詞用法辞典」1989, 東京(大修館)(756語)
- vi. Hong Chaesong (洪在星) 他著 "Hyöndae Han'gugö l'ongsa kumun sajon (現代韓国語動詞構文辞典)", Seoul, 1997 (約770語)

2. Collocation, Slovosochetanieの理論にもとづくもの

r. 主要な単語を見出語とするもの

- ii. "Kenkyusha's New Dictionary of English Collocations" Edited by Senkichi Katsumata, Kenkyusha, Tokyo, 1958 (「新英和活用大辞典」第1版1939, 新版1958, 改訂版)
- iii. N. N. Prokopovich L. A. Deribad, E. N. Prokopovich "Imennoe i glagol'noe upravlenie v sovremennom russkom jazyke", Moskva, 1975 (「現代ロシア語における実詞のおよび動詞的支配」)

d. 主要な単語だけでなく従属な単語をも見出語とするもの

- ii. T. I. Amisimova, Z. E. Ivanova, R. V. Ul'janko "Posobie po leksicheskoj sochetamosti slov russkogo jazyka, Slovar'-spravochnik", Minsk, 1975 (約1900語(名詞, 形容詞, 動詞)(「ロシア語単語語彙的結合可能性辞典」)

- x. P. N. Denisov, V. V. Morkovkin 'Uchebnyi slovar' sochetaemosti slov russkogo jazyka', Moskva (約2500語) (「ロシア語単語結合可能性学習辞典」) (1255項目-名詞, 524項目-形容詞, 727項目-動詞)
- xi. L. I. Shirokova 'Ustojchivye slovosochetanija russkogo jazyka', Moskva, 1976 (「ロシア語の固い単語結合」)
- xii. Mel'čuk, I. et al 'Dictionnaire explicatif et combinatoire du français contemporain. Recherches lexico-sémantiques I, II, III' Press de l'Université de Montreal, 1984, 1988, 1993

菅野は従来のSentence Patternに基づくものは動詞の主要な単語結合、Valenz理論に基づくものは動詞の陳述的単語結合と動詞の主要な単語結合に属するように、両者とも単語結合理論で掬いきれるだけに、質のレベルこそ違え、「動詞中心」の単語結合辞典と位置づけた上で、本来の単語結合辞典と突き合わせながら、その異同を突き止めると同時に、これらの辞書に欠けたすべてのものに、さらに朝鮮語の特質に応じた形容名詞・冠形詞などを付け加えて、理想的な朝鮮語単語結合辞典のあるべき姿を描き出した。つまりこれらの辞書から抜けた形容詞の陳述的単語結合・動詞の従属的な単語結合を補うほか、さらに形容名詞の陳述的単語結合・形容名詞の主要な単語結合・形容名詞の従属的な単語結合・冠形詞の従属的な単語結合をも含めて、記述を行おうと試みた。

次の表は菅野がまとめた二つの表に基づいて、筆者が若干修正したものである。注意すべきは従来の動詞的単語結合・形容詞的単語結合・名詞的単語結合はそれぞれ主要な単語結合の下位分類と位置づけられ、副詞的単語結合は動詞の主要な単語結合の一つに吸収される点である。

		i	i	ī	w	r	ri	ri	ū	x	xi	
		Hor	Hel	Eng	En	小児	課程	Pro	Pos	Ucb	Ust	習野
陳述的単語	動詞		○	○	○	○	○		○	○		◇
	形容詞											◇
	形容名詞											◇
主要な単語	動詞	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◇
	動詞+動詞						○			○	○	◇
	形容詞						○	○	○	○	○	◇
	名詞						○		○	○		◇
	形容名詞											◇
從屬的な単語	動詞											◇
	形容詞									○		◇
	名詞									○		◇
	副詞									○		◇
	形容名詞											◇
	冠形詞											◇

Valenz理論に基づくいくつかの辞書はすでに紹介された通りだが、参考のために
HORNBY (1996) 第3版の文型と動詞 *teach* 「教える」に関する記述を見られたい。

Intransitive Verbs [V], [Vpr], [Vadv], [Vp]
Transitive Verbs [Vn], [Vnpr], [Vnadv], [Vnp]
Transitive Verbs + two objects [Vnn]
Linking Verbs [V-adj], [V-n], [Vn-adj], [Vn-n]
Verbs + that clause [V. that], [Vn. that], [Vpr. that]
Verbs + wh-clause [V. wh], [Vn. wh], [Vpr. wh]
Verbs + infinitive clause [V. to inf], [Vn. to inf], [V. n to inf], [Vpr. to inf], [Vn. inf (no to)]
Verbs + -ing clause [V. ing], [V. ing], [V. n ing]
Verbs + direct speech [V. speech]

teach /ti:tʃ/ *v* (*pt, pp taught* /tɔ:t/) **1(a)** to show sb how to do sth so that they will be able to do it themselves: [Vnn] *She teaches us Scottish dancing.* [Vn. to inf, Vn. wh] *He taught me (how) to drive.* **(b)** ~ sth (to sb/sth) to give sb information about a particular subject; to help sb learn sth: [Vn] *teach French/history/judo* [Vnn, Vnpr] *She teaches advanced students English/teaches English to advanced students.* **(c)** to do this for a living: [V] *She teaches at our local school.* [Vn] *He taught mathematics/woodwork for many years.* **○ note. 2** to encourage people to accept sth as a fact or principle: [Vn] *Christ taught forgiveness* (ie that we should forgive people who harm us, etc) [V. that] *He taught that the earth revolves around the sun* [Vn. to inf] *My parents taught me never to tell lies.* [also Vn. that, Vnn]. **3 (infml)** (no passive) to persuade sb not to do sth again by making them suffer so much that they are afraid to do it: [Vn, Vn. to inf] *So you lost all your money? That'll teach you (to gamble).* [Vnn] *It taught him a lesson he never forgot.* (used as a threat) [Vn. to inf] *I'll teach you to call* (ie punish you for calling) *me a liar!* **10M** **teach one's grandmother to suck 'eggs** (*infml*) to tell or show sb how to do sth that they can already do well, and probably better than oneself. (**you can't**) **teach an old dog new 'tricks** (*saying*) (one cannot) successfully make old people change their ideas, methods of work, etc. **teach 'school** (*US*) to be a teacher in a school.

なお勝保(1939)の『新英和活用大辞典』の単語結合辞典を改訂する仕事から生まれたのが市川(1995)『新編英和活用大辞典』(研究社)である。形式面では勝保(1958)の増補版で新設された名詞見出しのQ2(「名詞+名詞」を扱う項目)をQ(「形容詞+名詞」を扱う項目)と合体させて<形容詞・名詞+>としたほか、<+io do><+that節>などの統語的結合を記述した。動詞teach「教える」に関する記述は次のようである。

teach v. 教える; (口語) 罰を加える。

(副詞1) *teach competently* 立派に教える / *be strictly taught* 厳しく教えられている / *teach the students well [badly]* 生徒たちを教えるのがじょうず[へた]だ。

(+前置詞) *teach at [in] a junior high school* 中学校で教えている / *taught by the best teachers in the best way* 最良の教師に最良の教授法で教えられて / *teach one's students by precept and example* 教訓を聞かせ手本を示して生徒を教える / *teach for a living* 教師を職としている / *teach the names of the US states from a wall map* 掛け図でアメリカの州の名を教える / *He only teaches from books.* 書物による授業をするだけだ / *He teaches in a school.* ある学校で教鞭(せんとん)を取っている / *He was taught in the bitterest of all schools, that of experience.* 経験といういちばんつらい学校で訓練された / *teach grammar through composition* 作文によって文法を教える / *teach English to one's students* 生徒に英語を教える / *He taught composition with great success.* 彼の作文指導はたいそう効果があった。

(+to do) *teach one's son not to fight* 息子にけんかをしないように教える / *The accident taught me to drive more carefully.* その事故で運転はもっと気をつけなければならないとわかった / *I hope this will teach you not to leave your money lying about.* このことでお金を置きっぱなしにしてはいけないことを学び取ってもらいたい / *I'll teach you to be rude to her!* 彼女に失礼なことをしたらひどい目にあわせるぞ / (+that節) *He taught (us) that love is [was] important.* (私たちに)愛は大切だと教えた / *The accident taught (me) that driving at eighty miles an hour can be fatal.* その事故で時速80マイルで車を飛ばすことは命取りになりかねないとわかった / (+wh.) *This experience will teach you what life is all about.* この経験であなたも人生とはどんなものかわかるだろうよ / *We must teach our students not only what to say, but how to say it and when to say it.* 学生たちには何を言うべきかだけでなく、それをどう言うかまたいつ言うかも教えるなければならない / *I had to teach myself how to cook.* 料理のし方を自分で習得しなければならなかった。

(+確) *That'll teach you.* それで君も思い知るだろう。

最後にMEL'CUK (1984)の "Dictionnaire explicatif et combinatoire du fran-
-çais contemporain. Recherches lexico-sémantique I" に載っている語彙は僅か
50語に過ぎないが、従来の動詞・形容詞・名詞・副詞に限らず、前置詞をも射程二
入れて、精密な記述がなされる。次のリスト50語と動詞・形容詞・名詞・副詞・前
置詞を一例ずつ見られたい。

À LA TÊTE
ADMIRATION
ADMIRER
AIDE
AIDER
ASSISTANCE
ASSISTANT
ASSISTER
AU CŒUR
CŒUR
COLÈRE
COMPLIMENT
COMPLIMENTER
CORPS¹
CORPS²
DÉSÉSPoir
ENSEIGNEMENT

ENSEIGNER
ENTHOUSIASME
ENVIE
ÉTONNAMENT
ÉTONNANT
ÉTONNÉ
ÉTONNEMENT
ÉTONNER
ÉTONNER, s'
HAÏNE
HAÏR
INVITATION
INVITER
JOIE
MALADE
MALADIE

MÉMOIRE
MÉPRIS
MÉPRISER
OBJECTER
OBJECTION
OPINION
PROMESSE
PROMETTRE
PROPOSER
PROPOSER, se
PROPOSITION¹
RESPECT
RESPECTER
SECOND
SECONDER
TÊTE
VENT

ENSEIGNER, verbe.

1. X cause que Z apprenne H1.1b ... [*X enseigne les mathématiques aux étudiants*]
- 2a. X énonce une affirmation qui fait partie de sa doctrine... [*Soerute enseignait à ses disciples que...*]
- 2b. X contient une affirmation qui fait partie d'une doctrine ... [*La Bible nous enseigne que...*]
- 3a. Propriété ou action de X cause que Z apprenne la Y [*L'histoire nous enseigne que...*]
- 3b. Propriété ou action de X cause que Z apprenne H1a Y [*La servitude nous enseigne la ruse*]

1. *X* enseigne *Y* à *Z* = *X*, censé avoir la qualification professionnelle dans le domaine *Y*, cause que *Z* apprenne III.1b *Y* en transmettant, méthodiquement et dans un cadre officiel, à *Z* des connaissances (portant sur) *Y* ou des techniques (portant sur) *Y* [= CausConv₂₁(apprendre III.1b)].

Régime

1 = X	2 = Y	3 = Z
1. N	1. N 2. à V _{inf}	1. à N 2. rare N

1) C_{2,2} sans C_{3,1} } : impossible
2) C₂ + C_{3,2}

C₁ + C₂ : *Pierre enseigne la grammaire*
<la couture> / à faire cela

C₁ + C₂ + C₃ : *Pierre enseigne la grammaire*
à ses élèves

Impossible : **Pierre enseigne à danser* (1)
[= *Pierre enseigne à danser*
aux enfants]
**Pierre enseigne des enfants*
à lire (2) [= *Pierre enseigne*
des enfants]

Fonctions lexicales

Syn _c	: apprendre III.2, instruire Ia, vieilli professer I
Conv ₂₃₁	: s'enseigner [<i>La chimie ne peut s'en-</i> <i>seigner sans manipulations</i>]
S ₀	: enseignement Ia
S ₁ ^{usual}	: enseignant I; maître II.2, instituteur, professeur; précepteur
S ₂	: matière III
S ₃	: élève, étudiant
livre-S _{instr}	: manuel

Able₂ : enseignable [*Le tact est difficilement enseignable*]

Exemples

Il comprenait et retenait aisément tout ce qu'on lui enseignait [A. Lesage]. Ces diverses sciences sont enseignées dans les écoles par des spécialistes. Quelle est ta profession? – J'enseigne. Il m'a enseigné à ne négliger aucun détail. On comprend aisément que pour enseigner aux enfants ayant des aspirations et des niveaux intellectuels si variés et surtout pour enseigner aux jeunes gens d'âge ingrat, il faut au maître une habilité pédagogique particulière.

2a. X enseigne Y à $Z = X$ énonce une affirmation Y_1 , qui fait partie d'une doctrine Y_2 proposée 4a par X , dans le but de causer que Z sache le contenu de Y .

Régime

1 = X	2 = Y	3 = Z
1. N	1. N 2. que PROP	1. d N 2. rare N

- 1) C_2 : obligatoire s'il n'y a pas de $C_{3.2}$
- 2) $C_2 + C_{3.2}$: impossible
- $C_1 + C_2$: *Les philosophes enseignent l'égalité entre les hommes <que les hommes sont égaux>*
- $C_1 + C_2 + C_{3.1}$: *Socrate enseignait à ses disciples que la connaissance de soi est fondamentale*
- $C_1 + C_{3.2}$: *Allez enseigner toutes les nations... [Bible]*

Fonctions lexicales

- Sy_n : prêcher, professor 2
 S_1 : maître II.5, gourou
 S_2 : enseignement 2
 S_3 : disciple

Exemples

Darwin enseignait que les espèces sont issues les unes des autres selon les lois de la sélection naturelle. Il faut toujours enseigner la vérité aux hommes. Pythagore enseignait qu'après la mort nous renaissions dans la nature.

2b. X enseigne Y à $Z = X$ contient une affirmation Y_1 qui fait partie d'une doctrine Y_2 proposée 4a dans X [comme si X enseignait 2a Y à Z].

Régime

1 = X	2 = Y	3 = Z
1. N	1. N 2. que PROP obligatoire	1. à N

- $C_1 + C_2$: *La Bible enseigne la transcendance de Dieu <que Dieu est transcendant>*
 $C_1 + C_2 + C_3$: *La Bible nous enseigne que Dieu est transcendant*

Fonctions lexicales

- S_2 : enseignement 2

Exemples

Le christianisme enseigne qu'il faut aimer son prochain comme soi-même.

3a. X enseigne Y à $Z =$ Propriété ou action de X cause que Z apprenne la Y .

Régime

1 = X	2 = Y	3 = Z
1. N	1. N 2. <i>que</i> PROP obligatoire	1. à N

$C_1 + C_2$: *L'histoire enseigne le déclin de toutes les civilisations < que toutes les civilisations sont appelées à disparaître >*

$C_1 + C_2 + C_3$: *L'expérience nous enseigne que la guerre n'a jamais résolu les problèmes*

Fonctions lexicales

Syn : apprendre 1b
S₂ : enseignement 3

Exemples

Leur attitude au sage enseigne / Qu'il faut en ce monde qu'il craigne / Le tumulte et le mouvement [Ch. Baudelaire].
L'exemple de mes parents m'a enseigné le courage bien plus que ne l'auraient fait des discours.

3b. *X enseigne Y à Z* = Propriété ou action de X cause que Z apprenne IIa Y.

Régime

1 = X	2 = Y	3 = Z
1. N	1. N 2. à V _{inf} obligatoire	1. à N

$C_1 + C_2$: *La servitude enseigne la ruse < à ruser >*

$C_1 + C_2 + C_3$: *Mon père m'a enseigné la prudence par son exemple.*

Fonctions lexicales

ÉTONNEMENT, nom, masc, le plus souvent sg.

Étonnement de X devant Y = Émotion de X causée par le fait suivant: X devient sûr que l'événement (lié à) Y que X croyait peu probable a eu, a ou aura lieu; cette attitude est celle qu'on a normalement dans de pareilles situations.

Régime

1 = X	2 = Y
1. <i>de N</i>	1. <i>devant N</i>
2. <i>A_{pres}</i>	2. <i>à N</i>
3. <i>A</i>	3. <i>de V_{inf}</i>

- 1) $C_{2,2}$: N = *vue, écoute, annonce, ...*
- C_1 : *l'étonnement de Pierre, son étonnement, l'étonnement national*
- C_2 : *l'étonnement devant ce spectacle <devant son père>, l'étonnement à la vue de ce spectacle, l'étonnement d'avoir gagné cette bataille*
- $C_1 + C_2$: *l'étonnement de Pierre <son étonnement> devant ce spectacle <à la vue de ce spectacle>, l'étonnement populaire devant les troupes ennemies*
- Impossible : **son étonnement à la victoire* (1) [= *son étonnement devant la victoire <d'avoir vaincu>*]

Fonctions lexicales

- Syn : *surprise*
- Syn_n : *ébahissement, ahurissement, saisissement, stupeur, stupéfaction; émerveillement*
- $F_1 = \text{Conv}_{21}\text{Manif}$: *traduire [ART ~], montrer, exprimer*

	mer [ART/de l' ~]
malgré X, F ₁	: trahir [ART ~]
A ₂ Manif	: plein, rempli; empreint de [Ø/ART ~], d'[~] // étonné 2
Caus ₁ Manif	: manifester, montrer. litt marquer [ART/de l' ~], exprimer [ART ~]
Adv _{1c} Caus ₁ Manif	: avec [Ø/ART ~]
nonPerm ₁ Manif	: dissimuler, cacher [ART ~]
F ₂ = Degrad(<i>esprit</i>) -	
Sympt ₂₃	: devenir stupide [d' ~]
CausF ₂	: rendre [N] stupide [d' ~]
Degrad(<i>parole</i>) -	
Sympt ₂₃	: être muet, rester coi <court> [d' ~]
F ₃ = Degrad(<i>parole</i>) -	
Sympt ₂₁₃	: perdre [la parole d' ~]
CausF ₃	: rendre [N] muet [d' ~] // fam [Cl _{dat}] couper le sifflet
Degrad(<i>souffle</i>) -	
Sympt ₂₁₃	: fam en avoir le souffle coupé [(d' ~)]
Degrad ^{motor} (<i>corps</i>) -	
Sympt ₂₃	: se figer [d' ~]
Excess ^{motor} (<i>bouche</i>) -	
Sympt ₂₁₃	: rester bouche bée [d' ~]
Excess ^{dim} (<i>yeux</i>) -	
Sympt ₁₃	: ses yeux s'arrondissent [d' ~]
Excess ^{dim} (<i>yeux</i>) -	
Sympt ₂₁₃	: avoir les yeux ronds, écarquiller les yeux [d' ~]
SingS ₀ (<i>crier</i> - Sympt ₂₃)	: cri [d' ~]

Exemples

Elle a eu d'abord un immense étonnement ... [É. Ajar]. Il était stupide de surprise, dans un abîme d'étonnement [A. France]. L'étonnement ou le désir de paraître étonnée écarquillait ses yeux [M. Proust]. Il s'aventura jusqu'au Forum et là regarda avec étonnement les statues des dieux [G. de Sède]. ... l'éléphant Aboul Abas qui provoquait l'admiratif étonnement de tous les contemporains [G. de Sède]. Elle offrit à l'étranger un spectacle qui ne dut pas lui causer peu d'étonnement.

ÉTONNAMENT, adv.

X-er étonnement = De telle façon que l'X-ement peut étonner 1 [= Adv₁Able₁(étonner 1)].

Exemples

Le mariage et la province vieillissent étonnamment un homme. Il a changé étonnamment depuis sa maladie.

AU COEUR, loc. prép.

[Y est] *au cœur de X* = [Y est] au milieu de X qui n'est ni un événement ni un local [= Loc_{in}Centr(X) | X = *hiver, jeunesse, nuit, mêlée, place,...*, mais pas **foule, *vieillesse, *grossesse, *rue,...*].

Régime

1 = X	2 = Y
l. de N obligatoire	—

C₁ : *au cœur de la nuit* <de janvier, de l'hiver>

Fonctions lexicales

- Magn : // en plein cœur [de X] | X est une période de temps [*en plein cœur de l'été*]
 Oper₂ : être, se trouver [~]
 Caus₂Oper₂ : se placer, se mettre [~]

Exemples

Au cœur du danger on conserve des soucis d'homme [A. de Saint-Exupéry]. On était au cœur d'un hiver extrêmement rude [A. de Hamilton]. En attendant, les deux femmes, au cœur d'août, étaient à Paris [H. de Montherlant]. Ces fleurs [= les femmes] à leur deuxième floraison se sentaient plus belles qu'elles n'avaient été au cœur de leur plus belle jeunesse. Je suis sorti un moment sur la véranda, heureux, au cœur de la nuit. Au cœur de la mêlée, l'un des joueurs surgit. Au cœur de la place, une toute nouvelle boutique offre des disques et des livres. Un drame s'était produit au cœur du quotidien.

0.3 文型と結合価と単語結合

伝統文法では文の構造分析に際して、文をまず主語と述語に二分し、述語をさらに目的語ないし補語に分解していく本来アリストテレスの論理学に由来するとされるモデルを取っている。これは主語と述語と間に人称と数の形式的な一致が存在することを反映している。ラテン語などの死語は無論のこと、例えばスペイン語 *Trabajo mucho* 「(私は)大いに働く」の現代語などでわかるように、述語の活用形から人称と数が明瞭に区別できるために、特に述語の活用形の直前に主格人称代名詞を置く必要がない。

英語教育ではこの伝統文法の影響を受けて、決まって次のように基本5文型が取り上げられている。

第1文型: 主語 + 自動詞 { S + V }

第2文型: 主語 + 自動詞 + 補語 { S + V + C }

第3文型: 主語 + 他動詞 + 目的語 { S + V + O }

第4文型: 主語 + 他動詞 + 間接目的語 + 直接目的語 { S + V + IO + DO }

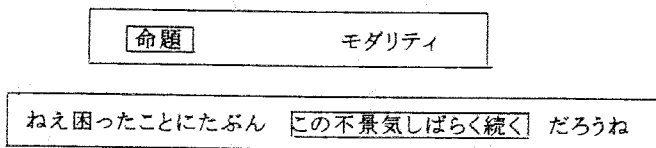
第5文型: 主語 + 他動詞 + 目的語 + 目的補語 { S + V + O + C }

こうした目的語を必要とする動詞(他動詞)と、必要としない動詞(自動詞)との分類の基準がなされる文型の立て方は辞書や英文解釈などに受け継がれているのが普通である。例えば小西ほか(1988)では文型の成立に不可欠な副詞的修飾句(M)の概念を導入し、{S+V}に{S+V+M}を加えたものを第1文型に、{S+V+O}に{S+V+O+M}を加えたものを第3文型に拡大したものの、基本5文型をそのまま援用しているし、原(1933)では英語の構文の理解は文の解剖(Analysis)によって得られるとして、文の解剖にこの基本5文型を最大限に使っているし、上述のHORNBYの文型も実際この基本5文型を基礎に、発展させたものであると考えられる。

上述の伝統文法と違って、TESNIÈREによって提唱され、ENGELやHELBIGやSCHUMACHERらによって受け継がれた結合価理論では従来の動詞・他動詞・自動詞という概念だけでは文構造上の諸問題を解決できないとして、「結合価」の概念を導入し、文成分を義務的補足成分と準義務的補足成分と添加成分と三つに分けたうえ、補足成分を9種にまとめて、30種の文型リストを抽出した。

一方VINOGRADOV(1954)では統辞論は「名付けの単位としての単語結合」と「伝達の

単位としての文」から成り立っており、単語結合は二つあるいはそれ以上の自立的な単語の結合によって、従属的な文法的関連——一致(ただし日本語には一致は存在しない)・支配・連接——の基礎の上に作られる統辞論的構造であるのに対して、文は形式的には文のイントネーションを、意味的には交際の単位と伝達の手段の機能を有するとして、単語結合はの文とは違って、文の基本的な特徴であるモダリティ・テンス・人称・伝達のイントネーションという統辞論的範疇を持たない点が異なる。また仁田(1995)では「文」は話し手が外在・内在的世界との関係で描き取った客観的な出来事や事柄を表したく命題>と、命題をめぐっての話し手の主体的な捉え方および話し手の発話伝達態度のあり方を表したくモダリティ>が含まれているとして、次の図例を敷衍している。



氏に従えば、この用例では「この不景気しばらく続く」は命題、「ねえ」「困ったことに」「たぶん」「だろう」「ね」はモダリティにそれぞれ属するという。

命題はこのような意味で単語結合に相当するものと言ってよからう。なぜならば「この不景気しばらく続く」に関しては「この不景気が続く」は支配、「しばらく続く」は連接というように、支配と連接との組み合わせによる従属的な文法的関係を持つ単語結合と考えられるからである。つまり上述の文型にしろ、結合価にしろいずれも単語結合ないし命題そのものではない。換言すれば、文型あるいは結合価は単語結合のなかに含まれているが、必ずしも単語結合と一致しているとは限らない。上述の用例に照らせば、「不景気が続く」は文型あるいは結合価、「この不景気がしばらく続く」は単語結合であることがわかる。

さらに敷衍すれば、文型は形式的には主語と述語とが決まって表示され、必要あらば、述語に内蔵される必須成分である目的語ないし補語が記述されており、意味的にはかなり抽象的な状況に依存している。結合価は形式的には従来の主語・目的語・補語などのすべての連用成分が述語に直接依存する要素として表示され、意味的には連用成分の意味素性ないし意味役割が記述される結合可能性を示している。

文型あるいは結合価はいずれも述語動詞が終止形で終わり、かつ能動態で示されのが常である。単語結合は文の基本的な特徴であるモダリティ・テンス・イントネーションを除いた

たすべての伝達内容であり、形式的には文型あるいは結合価に似ているものの、意味的には例えば単語(名詞)クラスと単語(動詞)クラスとの結び付きである文法的クラスに依存している点が異なるのである。

動詞「教える」を例に取れば、文型では「S (主語)が+ IO (間接目的語)を+ DO (直接目的語)に+ V (述語)」、結合価では「N[人間]が+N[人間]に+N[事]をV」、単語結合では「(N[人間]が)+N[人間]がなされるのにも+N[事]を+V[言語活動]」というように、いずれも違う理論による記述も不思議ではない。

注：

- (注 1) “Ustojchivre slovoschetanija russkogo jazyka”の定義を菅野(1993)から引用する。
- (注 2) 違う観点・姿勢から日本語の文型を扱うものには岡本(1937)・湯沢(1937)・青年文化協会(1942)・鈴木・南(1960,1963)・林(1960,1973)などがある。
- (注 3) 沈陽・鄭定欧編(1995)を参照されたい。
- (注 4) 石綿(1983)を参照されたい。
- (注 5) 仁田(1993:3)は actants を共演成分、circonstants を付加成分と名付けている。
- (注 6) 充足文とは意味的充足性が生じる文のこと、概念的に成田(1994)の「意味上の必要性」に近いものと思われる。
- (注 7) LECLERE Christian (1991:112-122)の論文を鄭定欧(1995)から引用する。
- (注 8) 1995年版のこの辞書は勝侯(1939)の『新英和活用大辞典』を改訂する仕事から生まれたものである。